

届けるためにやつて来たと思ふと、もう何を考へる暇もないやうに思つた。只すべての最後に向つて静かに静かに瞑目するより他に、覺悟をするより他に、何うする力もないことを思はねばならなかつた。今更、逃げ隠れすることは逆もこの場合出来ないことであるばかりか、然うまでしたところで恐ろしい最後は、随分罪なことをして来た自分の過去の行跡から、何うでも斯うでもやつて来なければならぬ、恐ろしい最後は、もう今更ら跪いても足搔ても脱れられる理のものではないことを、咄嗟のうちに覺悟するより他に仕方がなかつた。

頓て、どいどいと梯子の音をさせて、澤田が入つて来た時には、彼女は室の中央に悄然りとして坐つてゐた。大柄な絞りの浴衣の上に淺黄と黒のだんだらの伊達巻を締めたまゝで、一月ほども前から見れば、一層面癩れした容姿で悄然りとして彼女は坐つてゐたが其處へつかつかと荒い足音をたゝて入つて来た澤田を一目見ると、瘦た細身な膝をそつと捻向けて、無言で彼に軽く會釋をして見せた。が、男は、それにも拘らず固く握り締めた拳を、横に見せて、怒みと怒りとで燃ゆるやうな烈しい眼付をしながら、彼女の前に立はだかつてゐた。

「おい、あんまり馬鹿にするな。」

かうした、怒りに戦へるやうな男の罵詈雑言を一言きくと、今先刻まで、ぢいつと静かに瞑目しながら覺悟に向つて念を凝らしてゐた彼女ではあつたけれども、何うしたことが、それが忽ちに、強い強い反抗に打つて變つた。むらむらと彼を憎しむ心と、厭ふ心とで、覺悟も何も打忘れたやうな、甚い反抗心が充滿になつて體中を流れ廻つた。

而して彼が、再び、

「おい、何とか言はんか？」

かう又荒々しい鋒刃を向けて来ると、彼女は遂々、耐りかねたといふ風にして、その眞蒼な顔を振り上げた。

「何ですつて？」

「なにッ！」

「何ッて何です？」

かうお互に殺氣の漲るやうな言を語ひ合つてゐたが、其瞬間彼女は唇をわなわなと戦かせて充血しきつた眼を睜つて、憎惡の限りを顔に言はせて、男の眼を一目見たが、忽ちにして、そのもの凄いつの瞬間には、細い彼女の體の上に、鐵のやうに怨みと激怒とで張りきつた男の拳が、幾つとなく降りそ、いでるた。

「まあ、まあ、一寸待つて、まあ。」

かうお竹が下から飛び上つて來た時には、續いてかみさんも血相を變へて駈け上つて來た時は、彼女の悲鳴と、男の唸るやうな荒い息使ひとが、室の中に漲つてゐた。

「まあ、何か理由は存じまへんが、此處は御近所もあることですし、何卒、一寸靜かになされまして。」

お竹の上氣してゐるに引かへて下のかみさんは、かう言葉も落付いて、男の方に向つて頻と宥めることに努めた。

「いや、なあに、御心配をかけまして、實は、一寸した言葉の行違ひでしたけれど、あんまり女

の仕打が酷いものですからな。」

彼も少し極りが悪くなつたと見えて、苦々し氣に笑ひながら披けた前を合はしたり、其處に坐り直して、まだ幾らか戦への止まないやうな手を出して、眞に火を點けたりした。

「まあ、まあ、お腹立の理も大抵はお察し致しますが、何卒まあ御勘忍なされまして、お靜かにお話しになつても分ることですよつてに、何分世間の手前もあることですよつてに……。」

かうかみさんは彼にも心から同情を寄せるやうに、又女の上にも憐みを見せるやうにして、お竹が頻と介抱をする傍へ身を捻ぢ向けた。

「もう本當に好くなつたの、痛くも何ともないの、何卒放棄つといて下さい。」

奈美子は二人に氣をかねるやうにして、手を振つて見せたが體の何處を何う打たれたか、又は反抗しようとして頻と細い腕でもつて、薪のやうな頑丈な男の手首を捲きつけたのか、何かは知らず只體の上半身の各所がぎしぎしと痛み疼いてならなかつた。

「そんなら、氷を買つて來て、酷いところを冷やすと好い、何にしても、茲にゐては、却つてあとのために悪いさかい、まあ下へ降りて、あんたはおやすみ、澤田はんには私から、よくお説を

するさかい……。」

かうお竹は狂氣のやうになつて、起き上らうとする彼女を止めてゐるが、彼女は眞赤に泣き腫らした顔をあけて、其無黙なことを手で制してゐた。

「もう、眞實に構はないで下さいな、何でもなかつたんですから。」

かうは口先で強いことを言つてゐるが、赤く腫れ上つた腕を見ると、口惜しさが又こみあけて來ると見えて、熱い涙を頬に傳はらせてゐた。

一一四

本人よりは寧ろ狂氣のやうになつてゐるお竹を、一先づ、かみさんに下へ連れて行つて貰つて、彼女は憎んでも憎んでも嫌らないやうな男の方へ向き直つた。

「さあ、何かあなたもお怒みがあるなら、立派に仰しやつたら好いでせう。私は逃げも隠れもしないで、あなたの前に坐つてゐますから。」

かう奈美子は溢れ落ちる涙を拭かうともせず、彼の方へ身を摺り寄せて行くと、腕を拱いて

深く思案に耽つてゐるやうにしてゐる彼は、始めて彼女の方に一瞥を呉れて、而して苦々しけになほも沈黙つてゐた。

「さあ、あなたも此處まで私を追つ駈けてゐらしたのですから、何かお考へがあるのでせう、さつさとそれを仰しやつて下さい。」

かう又彼女が詰め寄りらばらりにして言ふと、
「剛情なことを言ふない。」

と、澤田は腹立しさうに彼女を睨め付けて、

「俺はお汝に怨みを言ひに來たのやないのや、お汝の生命を貰ひに來たのや。」

ふと然う波は口を迂らせると、幾らか自分にもその言葉が氣になつたかして、じろじろ彼女の方を眺め廻しながら、

「それが嫌やと思ふんなら、な、今の間に彼奴のことを思ひ斷つて仕舞へ、な、お汝は知らんやろけど、彼奴はもう疾くに東京へ行つて了ひよつた。お汝が何程泣いたかて騒いだかて、彼奴と夫婦になることは出來へんのや……。」

「ま、一寸待つて下さい……。」

彼女は袂で拭くとかうぼつぼつと、拙劣な口調で言い始めた彼の言葉を遮ぎつてかゝつた。

「彼奴と仰やるのは小村のことでせうが、あの人のことは、私もよく知つてゐるんです。あの人が龜井さんのお嬢さんと結婚することに、話しが決定つて、東京に迎へに行つたことも、みんなちやんと私は知つてゐます。私はそんな下らないことをあなたから伺ひ度くはないのです。」

「生意氣をいふない。」

彼も亦聲を荒らけてかゝつた、

「其様馬鹿な男の尻を追うて、長年恩になつた俺の方を何うするつもりや、さあ、何うして呉れるつもりや、返事をして呉れ……。」

「ですけれども、私が木屋町の家を出る時に、あなたに書き残して置いた手紙でも分るでせうが、私はもう、あなたと再び何う斯うする気はないのです。そんなら、あの小村との仲をつゞけて行くのかとお思ひになるでせうが、それも今の場合、私ははつきりとしたことが申せません。」

かういふ彼女の一言一句を、彼は恐い顔をしてちいつと聴き澄してゐた。

「まあ、あなたもよく氣を沈着けて、私の言葉の意味を誤解しないで聴いて下さい。本當のことを申しあげると、私はもうかうした汚い生活には、懲々してゐるんです。希くば、山の奥へでも行つて、一人で靜かに、淨い生活に入つて行き度いと思つてゐます。ですから私は然うも思つてゐる際ですからあの人が東京に行かうが、京都へ歸つて來ようが、私にすると關係外のことですの、それに、私の考へでは、あなたにもその内一度會つた上で、自分のこの考へを申し上げて、改めて、あなたに別れて戴くやうに願ひしようと思つてゐましたの。ですから、此後もあの人と仲好く暮らしたいために、あなたと別れ度いといふのぢやないのです。それとこれとは、私にすると別問題です……。」

かう彼女は言葉に力をこめて説いて行つた。

一一五

其話の間は、燃ゆるやうな情慾の眼を輝かしながら、彼は、

「ふん、ふん。」
と、半ば嘲るやうな、半ば調戲やうな返辭を續けてゐるが、次第に彼女が自分の主張を言ひ募つて來ると、流石に彼もちつとその沈着を、持ち應へてゐられないやうな、激しい感情が胸にこみあけて來てならなかつた。

「ぬけぬけと、そんな嘘を言ふたかて、俺にはお汝の心の底が眼に見えるやうに分つてゐるわ。ことによつたら、小村のあと追うて、東京三界まで、出掛けて行き度い位に思つてゐるやろ、ちやんと俺には分つてゐるのや。」

「まあ……。」

彼女もこの澤田の無遠慮な、而して女のやうな執拗な嫉妬には、惘れ果て、あとの句がつけなかつた。

「これは俺が邪推してゐるやうに思つてゐるやろが、俺にはちやんと證據があつて言ふことや、それにあの小村は、お汝は知るまいが、随分酷いことを爲る奴やが、それもみな俺の手許には證據が上つてゐる。俺は理があつて、それだけは口外せんつもりや、あ、俺も貧乏はしたけれど

も、女へ貢ぐために、盗みや泥棒はせんつもりや、ほんまに人ぎゝの悪い話しや、そんな悪い男を人もあらうに、長年世話をしてゐたお汝が、追驅けて歩くといふのは、よくよくの因果ちうものやと思つてゐるのやけれども、まあこれはお汝にきかしたかて仕様のない話しや、俺は只、この俺の長年の恩義を捨て、勝手な眞似をしてゐるお汝に訊ねることやが、然ういふぬけぬけした嘘を言はずに、ちやんとした返辭をして呉れ、なあ。」

「え、ですから私はお返辭をしてゐます。」

「なにつ？」

「まあ、そんなに大きな聲で脅かさなくつたつて好いぢやありませんか。何うせ、私はあなたに殺されるか、でなければこれまでのことを水に流して、悉かり諦めて戴くかより、他に仕方がないのですもの、私はもうちやんと覺悟してゐますもの、何うせ、生きてたつて、これから先の望みも楽しみもない體ですから、あなたのお氣の澄むやうにして戴くより仕方がありません。」

かう言つた彼女の眼には、如何にもすべてを思ひ諦めたやうな、絶望的なあるものが光つて見えた。

「まあ、其様、頼張らすやうなことは言はんが好い。」
 かう彼は少し薄氣味の悪さを感じて、にやにや微笑を口元に漾はせてゐたが、如何にも其處に
 觀念の眼を据ゑたやうに、ちつと固くなつて俯向いてゐる彼女を見ると、不圖彼は、今まで壓へ
 に壓へてゐたある者に、其時不意に突き起こされたかのやうにして、急に動搖をその面に現は
 して來た。

「まあ、お互に、そんな縁喜でもないことを言はずに、よう思案して、もつと正直な、お互に利
 益になる話をしやうやないか。」

「い、え、い、え、私は堅く決心しちまひましたから。」

「まあ、其様ことを言はずに……。」

「い、え、いけません、私は今日と云ふ今日、男の心の怖ろしいことを知りました。それはあな
 たのことぢやないのです。それは誰でも構ひませんが、男と女の情交ほど恐ろしい、情ないもの
 はないといふことを、ほんとにつくづく覺りましたの。」

「あ、分つた、もう分つた、お汝の心の清いなことはよう分つた。其處で俺はいふのやがなあ、

もう一度思ひ返して、何卒もう一度思ひ返して、俺の男を立て呉れないやろかな、俺の男の顔の
 立つやうになあ……何卒たのむ。」
 かう言つた彼は、兩の手を彼女の眼の前に持つて行つて、而して無格好にも、拜んで見せるや
 うな眞似をした。

一一六

顔色を眞蒼にして、何時までも執念く俯向いてゐる彼女を前にして、彼は頻と機嫌を直して語
 りつづけた。

「なあ、俺はもう今日までのことはさつぱり水に流して、お汝を責めようとは思はん。それもお
 汝のせいばかりやないさかい、俺はみな在つたことも思ひ斷るよつて、そやさかい、もう一遍だけ
 考へなほして呉れ、俺の顔をたて、呉れ、その上で、俺はまた改めて、暇を呉れといふたら、遣
 るさかい、決して其時は無理なことは言はんさかい、若しもそれが懸念なら、俺は茲で證書を書
 いて渡しても好いな、ほんまにもう一遍思ひ返して見て呉れんか。」

彼はこの一言一言を、まるで肺腑から絞り出すやうな聲音をして言ひつゞけた。

「なあ、奈美子お汝が俺を嫌がつて逃けて来たのには、他に大きな理由があつてのことや、言ふことはよう知つてゐるのや、何ぼ俺が暢氣やかて、その理はよう知つてゐる。其事について今日は篤と聽いて貰ひ度いことがあるのや、なあまあせめて聽くだけでも聽いてんか？」

三つに體を折れ曲げるやうにして、深く深く俯向いてゐた彼女は、左の肩の關節の甚い痛みを顔をしかめて凝乎怵へながら、身を伸して右の掌でそつと撫でるやうにして壓へてゐた。

「よつほど痛いか、それはえらい悪いことをしたな、何なら、叔母さんに膏藥でも買つて来て貰つて痛いところへ當てたら好いがな、え一寸さういうて依頼まうか。」

かう言つて、やをらに身を起こさうとする彼を、彼女は慌て、手で制した。

「いゝんです、大したことは無いんですから。」

「然うでもあるまい、随分力に任して撲つたさかいな、それに叔母さんも用がなかつたら、一寸一先づ歸つて貰ふたら何うや、今日は篤とお汝に話したいことがあるのやさかい、なあ、それと

も……。」

と、彼は室の周圍を眺め廻して何となく落付かぬ容子をしたが、

「それとも、何處ぞへ一寸出掛て行かうか、そして其處でお汝の手當をして、悠然り話をしやうやないか？」

隙があれば、何處かへ彼女を連れ出し度いと思つてゐた澤田は、遂々さう言つては、促してゐたが、奈美子は程よく配らひながら容易に座を立たうとしなかつた。

「此處だつて、お話を伺ひますわ、それに叔母さんのことは、打遣つといて下さい、氣が向いたら歸つて行きますから。」

「それでも、もう彼れこれ一時頃にもならうが、何處かへ飯でも喰べに行かう、え、仲直りにお汝の好きな洋食でも奢らう。」

かう言つてゐる彼の顔は、彼を捨て、逃げ出した女に對する意氣地も見榮もあつたものでなかつた。女の愛情を再び自分自身の上に縛ぐためには、恥も恥とは思へないといはんばかりの彼女の恐れる執着と、いやらしい要求とでその眼は燃えてゐるやうに見えた。

「もう何を私に強ひたつて駄目です。已に已に、あなたから去る時に、私は長い月日、忍びに忍んでゐたことを、遂行したに過ぎないんですから、今更私の體を、私の心を何う思ひ通りにしようとしたつて、それは到底あなたの力で出来ることではないのですから、一時は然ういふ時期もあつたでせうが、私はもう、彼れ以上の犠牲を拂ふことは出来ないのですから……。」

彼女は、眼に、態度に、それだけの意味を言はせて、矢張り其處に坐りつゝけて黙つてゐた。

一一七

何時までも、何時までも陰鬱なこの空氣の中に、彼女は澤田とかうして對ひ會つてゐると遠い昔のことなどが、様々に思ひ流れて來た。失戀の爲に、金のために、斯様な陋劣な男だつたことを知りながら、つい迂濶りと身を任して了つたことを思ふと、幾度繰り返しても盡きないやうな悔恨が、鼻と胸に湧き上つて來るのだつた。

「ほんまに、思ひ返して呉れる氣はないやろかな。」

澤田は又言ひ始めた。

「話と言ふのは、實は他でもないがな、俺は今度、少し考へがあつて、朝鮮の方へ渡るつもりや、何の、あの方の甚い失敗もあるのやけれど、内地では思はしい善い仕事もないし、人に顔合すのも恥かしいことだらけやさかい。一つ、乗り出して見るつもりや、其處で幸ひに朝鮮になら従兄も、大きな店を張つて商賣もしてゐるし、友人もあるさかい、仕事は山ほど轉がつとのや、何うぞ、あんたも來とお呉れやす、善い儲け口もあるさかい、こないに言うて來てゐる奴もあるのやな、そやよつてに、お汝さへ承知して呉れたら私は明日からでも行くつもりや、而して彼方で一二年遊びかたがた一儲けして内地へ歸つて來てもよし、又お汝だけ歸りたければ、其時こそ、俺は半分の文句も語はずに、きつぱりと縁を斷つてやるさかい、何卒、今度ばかりは、俺を先方まで送るつもりで、一緒に行つてお呉れんか、え、而してお汝さへ嫌でなかつたら、お徳を離縁して、彼地でお汝と夫婦になつても好いな、何うや、これにはお汝も異存はなからう、今度お汝が斯様氣になつたのも、元はと言へば日蔭の身が嫌やよつてのことやらう。」

彼は白睛の多い眼で、ぢいつと奈美子の顔を覗きこむやうにして言ひつゝけた。

「なあ、そのお汝の辛いところもよう判つてゐた。けれどもなあ、何ぼ何かで、俺も世間といふ

ものを持つてゐる以上、正歎お徳を離縁して、大きな顔をしては歩けんやないか、なあ、さうやろがな、其處で俺は、これはお汝の望みを叶へるためと、自分の失敗を繕ふためには、到底内地に安閑としてゐることやない、となあ、遂々決心したのや。」

「……………」

彼女は、ごいつとして聴き終ると、思はず深い吐息を洩らした。かうまで、自分を捕へるための男の用意が整つてゐるとは思はなかつたので、流石の彼女も顔色を變へずにはゐられなかつた。かうあとからあとからと、間斷なしに難問題をかけられるよりは寧ろ一氣に、一思ひに生命の最後を斷たれた方が、何れほど幸福であつたか知れなかつた。

「で、あなたは、もうそれに定めてゐらつしやる？」

彼女は餘りな恐ろしさに、少し悚けの色を見せてかう訊くと、彼はそれを彼女が氣乗りがして訊くものでも誤解したかして、

「あ、お汝との談合や、お汝さへ諾と言へば、もう明日からでも朝鮮へ言うてやるのは何でもない、直に、行けるやうになるのは請合や。」

「でも、朝鮮まで、入らつしやらなくつたつて、もつと他に、何か伶俐な方法があるでせう！」

「いや、や、もう、駄目や、家はもう破産も同様や、此儘お汝と一緒に死ぬか、朝鮮にでも行つて一旗上げるか、一ちか撥かや。」

彼は冗談のやうにも、眞劍のやうにも取れるやうな、物凄く笑ひを眼元に浮べて、何れか一つの彼女の返辭を待ち受けるやうな容子をして見せた。

一一八

「でもまあ、よく考へて見て下さいまし、私にだつて叔母といふ責任があるんですのに、幾ら何でも今茲でその即答は出来ませんわ。」

かう彼女は一時脱れなことをいふと、

「いや、そら不可。其様ことなら俺にも覺悟がある。今茲で其様馬鹿な話しをするのやなかつたのや、お前は考へるちう、口實を作つてこつそり逃げ出すつもりやろが、然うは許さんて。」

「口實ぢやありません、全く考へなければ、其様重大なことを今言つて今、直に決められないぢ

「やありませんか?。」

「けれども、お竹はんのことなら心配せんかて好い、あの人一人喰べて行く位なことなら、朝鮮から送つて来られんこともないし、何なら連れて行つてやつても好い、其様ことは、お前が一人で心配せんかて、私が従いてゐるのやもん、決して間違ふやうなことはあらへん。俺もお前が、心を改めて、以前の行爲が悪かつたといふ改心をするために、この俺の願望を容れて呉たなら、俺はもうお前の命令の通りにして、何でも言ふことをきくやうにする。それこそ間ちがひのないやうに、證文を入れても好い、いや、ほんまに、笑ひごとやない……。」

彼は、奈美子が口を噤んで、可いとも不可とも返辭をしないのでゐるのをつけ込むやうにして何時までも同じことを繰返しては勸めるのであつた。

風の無い、曇つた日であつたが膏の焼附くやうに、光つてゐる屋根の反射が、まるで蒸すやうに室の中に流れこんで来て、睡眠不足な頭腦は、ちつと疊を凝視するだけでもぐらぐらと眩暈を感じるほどであつた。そればかりか、先刻甚く撲たれた時に、後頭髪を固く掴んで捻ぢ伏せられたものと見えて、首ぐるみ挽ぎ取られるやうな不快な重さと痛みを、身を起こす度に、何うかす

ると、激しく感じられて来てならなかつた。

其うち、三時か四時近くもなつたらうと思ふ頃に、お竹は遠慮がちに其處へ顔を出して、朝も晝も食事を外した彼女のために、何か喰べるものを訊きに來たが、澤田はそれをきつかけに、

「あ、さうや、俺もお腹が空いてゐるさかい、洋食でも取つて貰ひまへう。」

かう言ひながら立上つて、下へ便所にでも降りて行つたやうであつた。

「そんなら、洋食にしまへうな。」

かう、お竹は立つて行かうとして

「まあ、えらいめにお逢ひたえな、そやさかい、私は、あの人は恐い人やと思つてゐるが……あんな、痛いところへ、何ぞ手當をしたら何うやらう?。」

かう心配らしく訊いて見たが奈美子は黙つて頭を揺つてゐた、彼女にするとこの險惡な空氣の中から、一刻も早く彼を追ひ出すより他に、安全な方法はないやうに思はれた。怒に弱身を見せて、そのために隙間から付け込まれるやうな拙いことはしたくなかつた。彼女は、この鬱陶しい息苦しい光景をちつと續けて行くうちに、彼女に對する男の興味が、一時的でも薄らいで行きさ

うに思はれたからだつた。然うでもしなければ、今日から明日明後日と續いても、彼はあの返辭をきくまでは、容易に此處から歸つて行きさうにはなかつたから……。

廳で澤田が下から上つて來さうな足音がするので、お竹はそつと彼女から離れて出て行つたが、入れ變りに上つて來た彼は又どつかりと同じところへ坐りなほして、暑さうに團扇づかひをはじめた。彼女はそれを見てゐると、可笑いやうな腹立たしいやうな心の他に、何とも言へない一種の悲哀を感じないではゐられなかつた。嫌はれた女のあとを追つかけて、又かうして尻をおちつけてゐる男の心を考へると、滑稽なやうな、悲惨なやうな、言ひ表せない異様な感じがした。

一一九

其夜のことであつた。澤田は何時までも彼女から朝鮮行のことについて、快い返辭をきくまでは、または以前のやうに心變りせぬ以前の彼女のやうに甘い温かい言葉をかけられるまでは、絶対に其處を動くものではない、といふ風な意氣込を見せて、容易に歸つて行かうとはしなかつたのだつた。では、今晚、よく考へて、明日でもお返辭をしますわ、ね、ですから、今日はまあ

これで、機嫌を直して歸つて行つて下さいな。」

奈美子はそんな風に言つて、頻となだめてかゝつたが、彼はにやにや薄氣味の悪い微笑を洩らして、何時までたつても、ぐづぐづして坐り込んでゐた。

「其様ことをいうて、お汝は今晚中に何處ぞへ逃けて行くのやろ、え？ 東京へでもあの男を追ひ駈けて行くつもりやろ？ えへ、へ、へ、へ。」

そんなことを言ひ出しても、彼女は例のやうに癩癩を立て、慍りもせず、努めて平靜に配らつてゐたが、それがまた澤田には非常に癩に障つてならなかつた。何となくよそよそしい彼女の態度が、容易に心を見せやうとしない彼女の底冷たい態度が頻と彼にさまざまの疑惑を湧かせて來て止まなかつた。

けれども、もうそろそろ下の家では蚊帳を吊して寢仕度くを始めたし、蒸し暑い夜でありながら雨戸を引く音が各所で聞え始めると、流星に彼も、此處で此儘ぐづぐづ言ひながら泊つて行くことは心に咎めたかして、少時間するとそろそろ歸り仕度を始めた、今日一日、それを着て坐り込んでゐたので、艱苦茶になつた着物の裾を氣にしながら、立上つて帯を締め直したり羽織を被

込んだりして、而してでもまだ立去り難い、心残りな感じがするかして、新らしく火を移した葺を吹かしつけながら、膝に帽子を載せたまゝで、中腰になつて痺の断れるほど其處にぢいつとしてゐた。

「明日は、それぢや私から電話をかけますから来て下さい。」

かう奈美子は恠へかねて、促すやうに定りをつけて言ふと、

「ふうん、そんなら、屹度間違ひはないやろな。」

彼は漸う思ひ断つたやうにして立上ると、不圖思ひついたやうに手を出して、彼女に握手を需めるやうな、嫌味な表情をして見せたが、彼女はそれをそつと避けるやうに、而して氣の付かぬやうな眼付をしながら、

「今日は脳がぐらぐらして、自分か他人か分らないやうな氣がします。まあ、明日までに、又あなたに心が返へるやうにするか、でなければ、あなたの最後の復讐を受けるか、何方か二つの決心をしますわ、ね。」

かう奈美子は淋しさうに笑つて、而して彼を階子段の下まで送つて行つた。

「まあ、まあ、あんたまあ、執念人やなあ、憫れるえなあ。」

と、お竹は云つて、それまで下のかみさんの部屋にかくれてゐた體を出して、彼が歸ると直ぐいそいそとして上つて來た。

「でもまあ、よう歸らはつたえなあ。」

「え、ですけれども、今晚は家に歸りませんよ。さあ、何處へ行くか、それは分りませんがよつほど、堪忍して出て行つたやうですからね、明日は、又何様難題を吹きかけるか分りませんわ。」

「さうか。」

お竹は心から恐ろしさうな顔をしながら、

「えらいことになつて來たえな。」

かうも言つて深い深い溜息をつくのだった。するうち不意にお竹の胸に思ひ浮んで來たものがあつたので、

「一層、あんた、今夜中に東京へお逃げ、え、さうおし、京にゐたら、何せ知れるに定つてゐる

さかい。」
かうお竹は頻りと勤めてきかなかつた。

— IIO —

「まあ、兎も角横にならせて下さいな。」
奈美子にはお竹に然う言つて寢床を敷いて貰つて、漸く人心地になつて體を其處に伸ばしたが、さてなかく眠られさうもなかつた。聽て自分の床も、簡單に其側に伸べて、而して蚊帳を吊り終つたお竹は、寢しなに彼女のために下からかみさんに借りて來た水枕を用意して、がんがんと疼くやうな彼女の後頭部にあて、やつたが、でも容易に彼女は寢付かれさうに見えなかつた。
「何ぞ、お薬でも塗りまへうか痛いところへ？」
「なあに、あれはもう大分好いやうなの。」
「さうか、そんならもう何にも考へんやうにして、ちやつと一眠りおよすみ！」
「え、だけど。」

奈美子は苦しさに幾度となく寢返りを打つてゐたが、考へれば考へるほど、自分の愚さが自分の醜さが黙つて濟して置けないやうな感じがしてならなかつた。
「ほんとに、私は馬鹿だつたわねえ。」
悔恨の涙が、しつきりなしに眼を衝いて流れて來て止まなかつた。
澤田から脱れるならば脱れるで、もつと惻怛な、誰に話してきかしても、正當と思はれるやうな、普通な方法も手段もあつたものを、何といふ愚な、拙い道を踏んで來たらう、かう思ふと身を掻き撈り度いやうな、腹立しいやうな、慙愧に堪へないやうな、言ひやうもない苦悶が頻と湧き上つて來てならなかつた。それでゐて、昨夜別れた雪之助に對する懐かしさが戀しさが、今となつて見ると、一層強烈な色彩で再び心の底に描き出されて來ることをも否めなかつた。澤田に對する、嫌惡な感情が燃え盛れば盛るほど、雪之助に對する止みがたい執着が強く強く胸を壓してこみ上つて來るのだつた。あのやうに、薄情なことを言つて、または、緋紗子と結婚をするのも、みな自分達の戀の生活を安定にするためだといふやうな熱情を語つてきかせて、而して女の言葉には耳も籍さずに、のがれるやうに東京へ旅立つて行つた男の心を考へると、薄情とばかり

に怨んで好いものか、それが男の真心から出た行爲として、黙つて先方のするに任せてゐる方が好いのか考へても考へても、分らなかつた。いつそ、彼が薄情なら薄情で、此方も澤田の手にかかつて無残な最彼を遂げた方が、どれほど彼の心を突刺すやうな復讐になつて痛快か知れないと思はれるし、又はそのあとで真心を知らずに死んだ女の心を、怨み悲しんで悶えるかも知れないと思ふと、眞に何う自分を處決して好いか分らなくなつて来て仕様がなかつた。

幾度も幾度も寢返りを打つたり、そのまゝ、息の絶えるほど泣き咽んだりしてゐた彼女が、頻りとお竹に慰められて頓て夜がしらじら明け初める頃にうつうつと眠りに就いたのであつた。而して諸共に、前後不覺になつてぐつぐつと寝込んでゐたお竹が、頓て夜がすつかり明けきつて、雨戸の隙間から、紅い熱さうな日光がさし込んで来る頃になつて、むつくりと起き上るとふと階子の方でみしみし人の上つて来る音がするので、何氣なしに蚊帳から這ひ出て慌て、披けた裾をかき合せたり、細帯を締め直したりしてゐると、

「まだ、お休みですか？」

かう聲をかけたのは例の澤田だつた。

「まあ。」

かう言つた、お竹は一氣に眠氣を醒まさされたばかりか、がつかりとして二の句が次けなかつたが、彼はそんなことには頓着もなくづかづか奈美子の枕元の方へ入つて行つた。

豈夫お竹は、一夜のうちに、深く深く決心をした彼が、祕かに鋭利な洋刀などを懐中にして淺まし悲劇の一場を演ずるために、やつて来たのだとは、思つてゐなかつた。

一一一

秋江が小石川の幸雄の家に訪ねて行つたのは、彼女が雪之助を連れて、東京に到着した翌朝であつた。

「おや、あなたお一人ですか？」

幸雄は不思議なことだと言はんばかりに、眼を睜ると、秋江は態と恍けたやうにして、

「へえ。」

など、生返辭をしてゐた。

「まあ、併しよく入つしやいました、前からさう言つて下さればお迎へしたんですのに、でもよく解りましたね。」

幸雄は其の朝、少し書齋に調べ物が残つてゐたので、今日は終日外出しないつもりで、せつせとそれらを讀んだり書き留めたりしてゐると、其處へ秋江がひよつくりと一人でやつて來たので、直に座敷へ通させて、自分も下りて行て快よくもてなすやうにしてゐた。

「ま、それでも、お家で好かつた。」

かう、漸と心を落付かせたやうにそよそよと風の流れて入る縁端近くに座を占めた秋江は、激しい炎暑の旅の疲れでか又は緋紗子の問題が、甚く彼女の心を悩ましたものか、幸雄が此前京都で別れた時より、づつと顔色も悪くなつて、二つ二つ年の老けたやうな寂しい衰弱が見えてゐた。肩の肉など、けつそり落ちたやうなところがあつた。もともと、あまり肥つてゐない質の彼女ではあつたけれども、幸雄は何だかいやに小淋しいやうに感じられてならなかつた。亡父の生きてゐた頃には、年増盛りの美しさを見せた彼女の印象が、深く脳裡に残つてゐたので、かうして旅に出して見ると、生氣のない容子も悉く幸雄には不思議なやうな感じを與へた。

「芝の田中の方へはまだ入らつしやらないでせう。」

「へえ、今度の家はまだ知らんさかい、先の家には二度行たけれども。」

「さうですか、ぢや二人を此方へ呼びませう。」

かう彼は言ふと、何とおもつてか、彼女はそれどころでもないといふ風に手を振つて、

「まあ、まあ、待つとくれやす。あの人等に會ふのは明日でもよろしい、それよりかあなたに篤と話しをきいて貰ひ度うて來ましたの。」

かう秋江は頻とそれを止めたが、彼にすると、さういふ秋江がお金の激しい氣象におぢけ抜た彼女に會ふよりも前に、幸雄に同意を需め度いとする意味が、あまりに可笑しいほどよく解つてゐた。

「併し、緋紗子が、芝の小母さんと二人でやつて來て、何故京都から逃けて來たか、といふことを詳しく私に話してきかせましたが、ありや、併し僕も不賛成です。あんなことは全くよくないことですからね。本人の意志に背いてまで無理に結婚させるなんてことは、昔の時代ぢやあるまいし、それは、あんまり慘酷ですからね。」

かう彼は自分のことは別にして、秋江の言はうとする處を、眞向から打破るやうにした。

「へえ、それはさうです。けれどもものは、縦から見ると横から見るとは、又異ひますさかに、あんたのやうに、一方だけをきいて、一方をきかんといふのも片手落です。」

「え、それや然うでせうが、併し、この問題を裁く可き僕自身が、已に、あの結婚、小村との結婚は不承知なんです。」

言ひ度だけのことは、思ひ断つて言ふつもりで、かう彼はきつぱりと言ひ放つた。

一一一

「そんな無理なことがありますかいな。」

幸雄の先手を越えた、強固な態度を見ると、彼女はさうと覺悟はしてゐたことであつたけれども、今更のやうに口惜しくなつて、自然に涙が湧き上つて來た。

「そんな、無理をいうて、何處まで私をお苛めるのえ、東京三界まで來て、あんたにまで苛められますのか？ あほんまに、私はそんな意りやなかつた。」

「まあ、まあ、静かになさい、もつと冷靜にしてゐても、話しは出来ることですから。」
かう幸雄は頻と彼女を宥めてか、つたが、緋紗子に逃げられた怨みを、彼に向つて、散々にあてこするつもりでゐた矢先だつたので、腦の調子も狂ひさうな腹立しさが一氣に胸をついてこみあがつて來た。

「あの家を、あんたに繼いとくはないといふと、あんたは東京の事業が大事やちうてお逃けるし、そんなら、緋紗子と私にお呉れやすといふと、何とか彼とかいうて、人に賣るとお言ひるし、それでは私も叶はんさかい、遂々私は思案した上句、あんたから、あの家や店をお賣りるのと同値で緋紗子に賣つて貰うて、さうして、緋紗子には小村を養子にせうと思ふたのやな、賣つて貰ふお金は、何ぼ何かで私でも、借らうと思ふたら貸して貰ふ先方もありますさかいに、決してあんたの厄介にはなるつもりやおへんのどす。へえ、へえ、私はあんたが譲つてやるとお言ひたら、今が今でも、ちやんとそのお金は用意します。立派に借るところがありますさかいに。」

最初は彼女も、腹立たしさと、口惜しさで、言葉もしどろもどろに言つてゐたが、割合に順しく無言で彼女の言ふところを、一々頷きながら聽いてゐる幸雄を見ると、勢ひ彼女は氣乗りが

して来た。彼女が雪之助と一晚、新橋の旅館で計畫して来た通りの話しのすぢ道を、ぼつぼつ辿りながら話しはじめた。

すると、

「その借りる先方は誰です？」

幸雄は無駄だと思ひながら、かう聴きたさうにすると、秋江は涙を収めて、得意らしく膝をすすめて来た。りした。

「それは、あんたが承知して、そんなら、緋紗子に譲つてやらうとお言ひるまでは、逆も打明けられまへんが。そやないか、あんたも私には何事も秘密で、私に反対するやうにしてお居るのに、何で私が一々相談が出来まへう。」

「いや、何も相談をして下さいといふのぢやないのです。が一寸その金主をきいて見やうと思つた。けのことでした。」

などと彼は自分の言葉を打消すやうにして言つた。

「が、それは固くお断りをします、緋紗子にあの店を繼續させて好いものなら、最初つから、私は

無條件で彼女に與ります。私は緋紗子にそれをやらせることが可哀さうだから、本人の自由意志を束縛することになるから、それで與らないだけのことです、金で賣買をするのは、それは他人同志のことです、家族の仲で賣るも賣らんもありません。」

かう彼はきつぱりと追け加へた。

「まあ、そんなら、私は何うしたら好いのです。又緋紗子をあんたは何うしませうとお言ひるのえ。緋紗子の一生まで、あんたに左右されるわけはあらしまへんえ。」

秋江も、話しが遂々最後の問題にまで来たと思ふと、自然と彼に對して喰つてかゝるやうな態度を示して来た。

一一三三

其時幸雄の脳裡には、秋江と只徒らに争ふことの愚なことが、不圖思ひ浮んで来たので、努めて彼は烈しい言をさけて、穩かに彼女を宥めてかゝつた。

「まあ、僕もあとでよく考へますから、あなたも芝の小母さんともよく相談なすつて、其上で

又お話しを伺ひませう。ね、あなたと僕と幾ら何と言つて力んだところで、肝腎の緋紗子が又何と言ふか分りませんからね。まあ、そんな話は後にしませう。」

かう頻と彼はその話しをさけた。而して午にも近かつたので、久振で何か秋江の好きなものを取寄せて食事でも始めやうとすると、秋江は急に身繕ろひをして、

「私は、まだまだ何にも欲しいことないのです。それよか、これから芝へ行って来て、二人に會ふて直接に話しをして來ますさ。」

かう彼女は言つてそゝくさとして立上つた。

「まあ、好いでせう。」と、幸雄は止めるには止めたが、併しかうした不快な感情で睨みあひながら、食事を共にするのにも面白くなかつたので、遂々彼女の言葉通りに、芝の方へ俵で彼女を送り届けることにした。

「それでは、又。」
かう彼女は幸雄に挨拶をして門前に待つてゐた俵に乗つて、暑い日盛りを出掛けて行つた。けれども、外は京都とちがつて市街の上を吹き渡る風も、反つて家の中より涼しい位であつた。秋

江はまだ良人が在世の頃に、一二度東京に來たことがあつた、緋紗子の顔を見るのが樂みなのと、長い道中を汽車で只二人きりの氣樂な旅だといふのが、何よりもの慰みであつた。いま其頃のこゝとがゆくりなく思ひ出されて來た、濠端を俵が通つて行くときにも、感慨無量なものがあつた。あの頃の夢のやうな幸福につつまれた生活を思ひ出すだけでも、涙が自然に滲み出るやうだつた。

「良人が亡くなつても、緋紗子が残つてさへるれば。」かうしたことで、幾度となく淋しい現在を心細い未來をぢつと慰めたか知れなかつた。けれども今となるとその緋紗子も、何うかすると自分の手からするりと抜け出て、遂々元の一人にされて了ひさうでならなかつた。

これといふのも、みなあの幸雄の仕業で、あの男さへるなければ、雪之助と緋紗子との三人で氣樂な家庭が作つてゐられるのだ、と思ふと、最後まで、あの幸雄のために敵對してやらねばならないといふやうな考へが犇と胸に湧き上つて來るのだつた。さうするために緋紗子を説き付ける可き言葉や、あの腕達者な、氣象の勝れた芝のお金き説き落す方法などを考へると、彼女は氣が塞るやうであつた。

けれども、自分などより、一段も二段も理窟の上手な、あのお金を、巧妙に味方に引入れるといふやうなことは、到底出来ない業と思はないこともなかつた。彼女はあまり言葉の上で争はずに、本人の緋紗子をそつと新橋の旅館に引寄せて、二人でさまざまに宥め嫌かして、欺いて連れ歸るが一番上策だといふ考慮を抱いてゐた。彼女は敵の前に飛び込むやうな、恐ろしいことを敢てするのも、只この一つの方法を握つてゐるからだ、かう心に幾度となく思ひ定めて緋紗子を欺して引寄せる口實などを、頻りと考へこんでゐた。

俵が頓て兼房町の田中の家を探し當たので、彼女は妙に胸元の騒ぐのを覚えながら中に入つて行くと、その氣配でそれと知つたのか奥の方からお金が、簾垂越しに此方をちいつと差し覗いてゐるが、それが秋江だと解ると、

「あら、まあ、秋江さんですか。」

かう大袈裟に大きな聲で言ひながら、急しく出て來た彼女を迎へ入れた。

一一四

「まあ、でも好く入らつしやいましたね、あなたお一人で。」

かうお金はさも懐しさに、心を抜いて見せるやうな態度で秋江を迎へたが、そのくせ秋江がかうして一人消然として訪ねて來た心の底を見破るやうに鋭い視線を折々彼女の方へ投げかけながら、

「前に御報らせなすつて下されば私だつて、緋紗さんだつてお迎へするんですのに、まあ、あまり突然で驚いちまひますわ。」

などと言つて頻と彼女を正座に勧めたりした。かうして女同志の長い挨拶が終つて、茶や菓子を取り出してから、

「緋紗さん、緋紗さん、母様がお出になりましたよ。」

などと二階で何かしてゐる緋紗子に向つて、高い聲で呼んだ。

「まあ、本當に、此度はあなたにも御心配でゐらしたでせう、それは十分お察し致しますよ。」「かうお金が言ふと、

「へえ、もう、何が何やら、手の付けやうも御座りまへん。あの大きな店を控へて、主人が亡く

なられますと、其方のことも此方のことも、何うして好やら分らしまへんのでなあ、幸にあの小村が居て呉れますので、萬事まことに好都合ですが、あれが居まへん時には私のやうな女一人で、店の者や奉公人を使うて行くことは、一通りの苦勞や御座いまへん。」

などとも言つて、良人が亡くなつてからの種々の紛争や、幸雄の考へと、自分の方針との齟齬する點やなどを、諄々として愚痴交りに話したりした。

「はあ、それは誠にさうでせうつて。お察しいたしますよ。」

かうお金は好加減に聞き流して、

「でもあなたは、些ともお變りになりませんわねえ。昔とそのまま、ですよ。それは些とはお瘦なすつたやうなところもあるけれども、相變らずお若いのね、第一苦勞が私達とは違ひますからね。」

かう言ふお金の言葉には、幸雄の意思に背いて、勝手に様々な苦勞をしてゐる秋江の放恣を諒なすやうな意味か仄めかされてゐた。

「苦勞がちがふどころですかいな。女一人で、とにもかくにも斯うして世間に笑はれずにやつて行

けますだけ、それだけあんた人並のことやあらしまへん。」

「だけれども、それも一つはあなたの心からですよ、かうやつて、相續人もあり、緋いさんといふ立派な子供もあるのに、何がさう苦勞でせう。さう云やあ私達の方が何れだけ將來は心細いでせうか……。」

「立派な子供があつても、思ふやうにならなんだら、矢張り同じこつてすわいな。」

かう二人が同じやうな愚痴を繰返してゐると、一寸身なりを改めて、緋紗子が俯むきがちに入つて來た。

「入らつしやいまし、まあ母様何ともお詫びのしやうが御座いませんわ。」

かう緋紗子は其處に手をついて、深く母の前に謝罪するやうな格好をしてゐたが、頓には言葉が出ないといふ風に、ぢろりと其方に眼を遣つたまゝで駄つてゐる秋江の緊張た容子を見ると、彼女は思はず息が塞まりさうだつた。

「まあ、あなたもお腹立でせうが若い人のなさることですから何卒お許しなすつて下さい、ほんのもう、感情にまかせて、悪いことだと知りながら、やつたことでせうから、何卒、今度ばかり

はお許しなすつて下さい。」

お金は二人の容子を交る交る見ながら、かう言つて頻りと秋江の方を宥めてかゝつた。

「……………」

秋江はなほも一種言ひやうもない怨めしさうな表情をして、我子の姿をちいつと凝視するたが、お金が頻りと取扱し顔で何か言ふので、黙つて、深い吐息をついて、さも思ひ餘つたといふやうな誇張して表情をして見せた。

一一五

秋江が緋紗子を再び連れて歸ることに就いて、頻と話しを向けやうとするに拘らず、お金は世馴れた調子で、彼女に行水をすゝめたり、彼女の好みさうな筈すしなどを取寄せて、巧に話題を避けてゐるたが、其うち緋紗子が、軽井澤から歸ると齒が悪くなつて、四五日通つてゐる齒醫者へ又今日も行くと言ひ出したので、それを幸ひに彼女をこの席から退けるやうに出してやつて、而して始めて悠然と秋江と向ひ合つた。

「へえ、齒が悪いのですか？」

かう秋江が、流石に氣になると見えて容子を訊くので、

「いゝえ、なに蟲齒を一寸何うかすれば好いのでせう、大したことはないんですよ、直歸つて来ますから御心配は要りませんよ。」

など、打消すやうに言つて、而して緋紗子の居ない間に、話を片付けて了ひ度い、といふ風に膝を乗り出して来た。

「で、何ですかあなたは其小村といふ男と、ひいさんとを、是非に一緒にしたいお考へですか？」
この露骨なお金の問ひに、秋江はもう、あの緋紗子と幸雄との口から自分達の企圖が悉かり話されてゐるらしいのを想像して、一寸嫌な顔をして見せたが、併し怒つか祝しだてするよりか、すべての事實をさらけ出して、お金の加勢を得たが伶俐な方法かも知れないと思つて、雪之助を養子に取決めるまでの紛糾や、幸雄の方針の誤つてゐることや、緋紗子までが何時となく幸雄の感化を受けて来たことなど話してきかせた。

「まあ、然ういふ理で、私はもう三方から苛められて困まつてゐますのや、何卒まあ、私が可哀

さうやと思つて、あんたのお力で彼の子を京都へ歸つて呉れますやうに、お計ひなすつてお呉や
す。」

かう秋江が眼を潤ませながらかるく頭を下けて言ふと、

「いや、それはあなたにも似合はないことですよ。私はその養子問題は、大の不賛成です。だつて
さうですもの、現に幸雄さんといふ立派な相続者がありながら、何故養子をお取りなさるんで
す。」

「でもあの家を……。」

「さあ、あの家を繼ぐと仰しやるが、それやあなたの口實でせう、何故つて幸雄さんといふ相續
者があつて、その人が勝手に仕末をするぢやありませんか。あなたに何の責任があるでせう。亡
くなつた龜井さんにはあなたは申譯が立たないと思ひになるなら、それこそ、何ですよ、ひいさん
と幸雄さんの約束は何うなるんです。さ、あなたは肝腎のあのことに就いちや何とも仰しや
つて下さらないが、一體あれは嘘を仰やつたことですか。亡くなつた龜井さんが、ちやんとあの
ことに就いちや、私共の前で仰しやつた言葉があるんですからね。少くとも良人は、覺えてをり

ますですよ。ですから、私はお手渡しし難かつたんですけれども、幸雄さんと配偶して下さるん
なら、まあ仕方がない。幸に二人の仲は好きさうだしするから、これや屹度將來は幸福になる
かも知れないと思つて、私達は喜んでお返し申したんですからね、私にすりや、かう申しちやな
んですが、あなたも同様にあの子には十分想ひが残つてますよ、え、え、それや今だつて、
あの子の幸福になることなら、何様ことでもしやうと思つてゐます。あなたとは長年のお馴染で、
餘計なことは言ひ度くないが、あの子のためを思ふと、私やあなたから絶交されたつて恐ろしく
ない、何處までもあの子のためにあの縁談は成立たせて見せる、斯様に私は心で思つてゐんです。
まことにね、あなたには言ひ難いことですが、何卒あの子のためだと思つて、其方の方は斷念つ
て、幸雄さんとの仲を纏めてやつて下さいな。」

かうお金は一氣に説き立て、かゝつた。

一一六

緋紗子は齒醫者から歸つて來ると、其まゝ二階へ上つて行つた容子なので、秋江はお金が一寸



の間席を外したのを幸ひに、自分もそのあとから尾いて上つて行くと、緋紗子はお金に依頼まれたのか何か着物のやうなものを縫つてゐるが、母の姿を見ると、直に手を止めて、其處へ座蒲團などを持ち運んで来て勧めたりした。

「茲は涼しいえな。」

「え、本當に、風が好く入りますからね。」

「此方が南になるのか知らん。」

秋江はそんなことを言ひながら田中の書齋として使つてゐるらしいその八疊の一室をあちこちと見廻してゐたりした。少し西日が射すかして、片側の高窓に引いてある白いカーテンが、はたはた強い風に鳴つてゐた。何處と言つて見るものとてもなかつたが、狭くらしい庭に接した隣の屋根廂や、裏向ふの二階家などが手に取るやうで、幸雄の家とはちがつて何處か市街の中央らしい感じが漾つてゐるので、秋江には何となくもの珍らしくもあり、東京らしい氣分を味はされるやうだつた。

「あれから、茲にばつかりおるたのか？ 小石川の方へは行かなんだの？」

秋江はかう遠廻しに、緋紗子が東京に来てからの容子を知りたさうに言ひ出した。「兄様のお家には、小母さんと御一緒したきりですの。」

かう緋紗子は答へて、輕井澤に三日間も滞在してゐたことに就いては言ひ洩らさなかつた。珍しい未知の土地を見て来たといふ意味に於ても、母に語つてきかせたいのは一杯だつたけれども、若い二人を唆のかしたといふ風な意味に於てお金に於てお金が怨まれることは知れきつてゐるので、態とそれを秘してゐた。

「まあ、それでもお汝は大膽なことをお爲るやうになつた。」

ふと秋江の胸には、娘に對して、言ふ可き言葉が、責めなければならぬ種々な言葉が、腹立たしい感情と共に湧き上つて來るのだつた。

「何ぼ何かて、女だてらに、我家を抜け出すといふことがあるやろか、あんまりな仕業やないか、私は思ひきつて、お汝と別れるつもりやつた。い、え、今度會うて見て、まだお汝が改心する氣色がなかつたら、私は立派にお汝を勘當する氣で來たのや。」

「え。そんなにお愠りになるだらうとは、もう覺悟してをりましたの……。」

緋紗子には流石に固くならずにはゐられなかつた。母にも優して言ひたい言葉が充滿に胸には溜つてゐたけれども、併し翻つて母の立場を考へると、自分が出たあとの母の寂しい生活を考へると、怨みと腹立たしさで亢奮しきつてゐる母の感情には同情せずにはゐられないやうな氣もして來た。

「私はな、母親といふ立場から考へたら、今度は迎ひに來るのやなかつたのや。な、けれども其處には言ふに言へない義理があつて、今度は何うでも斯うでもお汝を連れて歸らんちうと、もうあの家は潰れるのやさかい。そうしたら、この私の代になつてからあの大きな家が潰れたというて、もう私は生きてゐる事も死ぬことも出來ないやうな。」

かういふうちに、秋江の眼からはほそぼそと涙が滴つて來た。

「なあ、お母様のこの苦しい立場を察してお呉れ、而してもう一度死んだつもりになつて京都のお家へ歸つてお呉れ、さうしたら、私はお汝への辯明に一思ひに死んで見せる。死んであんたに謝罪まります。」

かう言つて秋江は例のやうに潜然として疊に額をあてて泣出して了つた。

窓に射してゐた焦々したやうな夕日が次第に薄れて行つて、涼しげな、仄のりとした水色の暮色が家の周圍を包みこめて來た。緋紗子は夕暮になると、京都の家に残して來た母のことを思ひ出したり、幸雄に對する愛を募らせたりして、何とも言へない焦燥しい感情で、毎日日を送つてゐるが、かうして眼の邊り母に會つて見ると、それらはみんな自分の責任の廻避から、遂々こんなことになつたやうな氣がして來て、たとひ一週間でも十日間でも、自分だけ安隱な位置にのがれてゐることが、今となつて痛切に責められて來るのだつた。

母は幸雄の家で、已に十分に言ひ負かされて來たらしく、又お金にも自分の留守中可なり手巖しい斷判を受けたらしいのでその極度に神経を刺戟した結果例のやうに、持病のヒステリーが發作的に出て來たのだらうとは思つたが、それもこれもみんな引くるめて自分一人の愚しい所業から生れて來たもの、やうに思はれてならなかつた。

彼女は、努めて母の神経に障らないやうに、比較的冷靜な態度を持しながら、下のお金の耳に

かうした母子の淺ましい態を見られたくなかつたので、小聲で頻と母を慰めたり、今度の自分の亂暴な所業を幾度となく謝罪つたりしてゐた。

「本當に濟みません、そんなに御心配をかけるだらうとは思つてゐましたけれども、あの場合あ

あするより仕方がなかつたからでしたのよ。何卒、母様、今度だけは許しで下さいませな。」
かういふ生温い言葉では、容易に母の烈しい感情を鎮めることは出來ないとは思つてゐたけれども、けれども、けれどもこれ以上、もつと突き込んで自分の心を母に打明ける氣にはなれなかつた。一時的に、母の平靜を取返さうとばかりに努めてゐたのだつたけれども、秋江にするときさうした娘の隔意のある態度が、耐らなく不愉快でならなかつた。成程自分の要求も無理かは知れないけれども、併し彼女が母を捨てて、家を捨ててまでかうして遠くへ逃げて來た理由、自分に祕さう祕さうとして包んでゐる、その深い理由、それをもつと突きつめて訊きたかつた。

「まあ、母様もつと、氣を鎮めて下さいませな、さう亢奮してゐらつしやると、私、何にも言ふことは出來ませんわ。」

「い、え、お母様のことは、まあ何うでもえ、さかい、抛とくが好え、氣の焦だつたのは私の性

分やさかいに……。」

かう秋江は煩累けに手を拂ひ退けて、

「そんなことを言うてるるよりか、あんたの考へを茲できつぱりと明してお了ひ、お母様の前でこれこれですさかいにというて、歸らんなら歸らんとお了ひ、一體まあ、何と申うて、今度みたいなことをお爲たのや、又此處が戀しうなつて、お金さんの子になりたうて来てやつたのか、え、さあ何ういふ理や、はつきりとお母様に言ふとお了ひ。」

かうした例の放恣な母のふるまひが、馬鹿々々しく思はれてならなかつたけれども、緋紗子は反抗らしい容子も見せずに、黙つて深く俯向いてゐた。

「又、あのお金さんの子になりたうなつたのか、あの人なら大事にして、お汝の仕たい放題にして呉れはるやろ、幸雄にも添はして呉れはるやろし、な、氣に入つたことばつかしやろ。」

「まあ、母様。」

かう緋紗子は耐りかねたといふ風にして、母の口を塞いでかかつた。そろそろお金に對しても嫉妬らしい口吻を洩らしてゐる秋江の淺ましい心を見ると、緋紗子は思はず太い溜息を吐いた。

二二八

「さうすると、何かい、幸雄とお汝との仲で、直接に約束でもしちやつたか？ え、それをはつきりと茲で打明けてお了ひ。」

秋江はまた、かうも言つて迫つて來た。

「い、え、約束と言つたつて、別にこれと言つて、打明けるほどのことはないのですけれども兄様が、亡父様が取決めて下さつたことだから、二人はさうなつた方が好いし、さうなることが本當の道だ、と仰しやるものですから、私は無論快くお返辭しましたの。」

彼女は、輕井澤の夜道で話し合つたことなど、胸に描きながら臆する色もなく、母に應へた。「さうか？ さういふ氣で二人がお居ることを知らんものやさかい、お母様は、えらい恥をかきましたな。」

秋江はこの告白をきくと、今更らしくむらむらとした反抗心が胸を衝いて出て來るのを覺えた。「亡父さんが、お汝達に何を一體遺言しやはつたのや、そんなことは一體、誰からおき、た、兄

様は亡父さんの亡くなる時に傍にでもるやはつたのか、現在このお母様に何の話しもなくしに直接にあんたに何ぞ亡父様が仰しやつたといふのか？」

「い、え、遺言や御座いませんわ、兄様も亡くなる時には、其處にゐらつしやらなかつたのですから、何もおき、になる筈はありません、私だつて、あの亡父様の苦しい中に、種々のことを伺ふとも思つてゐませんでしたけれども、今ではさう思つてゐますの、亡父様がもつと明晰と兄様と私とのことを、母様にも仰しやつて、取決めをして下さるとよかつたのですわ。」

「あほらしい。そんな馬鹿な話がありますか、大方お金さんからでも智慧つけされて、そんなことをいふのやろが、亡父さんは大の幸雄嫌ひや、何故あんな人とあんたを夫婦にせうと思つてはるものかいな、私は、現在このお母様は亡父様からそんなお話しは毛の先はとも聞いた覚えはないのやさかい！」

然うしてゐると、下からお金が上つて来て、遠慮がちに顔を出しながら、

「まあ、お話しはあとで悠然りして、お夕飯を召し上つて下さいませんか、本當に何も御座いませんけれど。」

かう秋江の方を見て言つて、

「緋いさん、あなたもまあ、母様も長い汽車でお疲れになつてゐらつしやるんですから、好い加減にして、あとで悠然りお話しが出来ますからね。」

などと言つて、徒らな二人の争ひを避けさせやうとしてゐた。

「御親切は有難う御座りますが實は旅館も取つて御座りますし致しますので、これからそつちへ歸りますさかい、何なら緋紗子を今晚一晚そつちへ連れて行きましたと篤と話しをせうと思ひまして。」

かう秋江は涙で汚した眼を外らしながら、打解けない容子を見せていふと、

「あら、まああなた、旅館なんて何ですなえ、そんなことをなさらなかつたつて好いちや御座いませんか、それに緋いさんは私の方へお預りしたことにしてお話しが決定りますまでは、お渡し出来ないことにしやうぢや御座いませんか、でないものに定りがつきませんもの、ねえ。」

お金は頻と秋江を引止めて、而うして仕舞ひには、緋紗子に秋江の旅館へ電話をかけさせて、今晚は此方で泊るやうに断りにやつたりした。

秋江が頻に否むにも拘らず、緋紗子はお金に言はれた通り、隣りの家の電話を借りて、旅館へかけて見ると、思ひがけなく電話口には雪之助が出て来るのであつた。

一二九

其翌日の夕方になつて、秋江は二人のなほ引止めるのもきかず新橋の旅館へ歸つて来たが、待ちくたびれてゐた雪之助は、

「御ゆつくりでしたね。」

などと皮肉らしく彼女を迎へた。秋江は昨日から今日へかけて戦ふだけ戦つたあとなので、彼に何と言はれて責められても言葉も返す勇氣がなかつた。

「あまり、結果は面白くなかつたでせう。」

かう彼は落付いて、三人の結束を固めてゐる容子を見抜くやうなことをいふと、

「面白くないどころか、あの強か者のお金さんにはもう何程私でも固つた。」

かう彼女は言つて、昨夜から今朝へかけて、緋紗子を口説くだけ口説いて見たが、お金が後押

しをしてゐるのか、幸雄が陰から働かしてゐるのか、何れにしても彼女の意思の、以外に強固なのに手の付けやうもないといふことを、ぼつぼつと話してきかせた。

「え、多分さうだらうと思つてゐました。」

雪之助は、半ば自分の威厳を落し度くないためでもあつたらうけれども、秋江の話してきかせることのひとつ一つを、如何にも自分の推察通りであつたやうに、頷いて見せた。

「だから、僕は言はないことぢやなかつたのです。緋紗子さんをそつと巧く瞞着して連れてお歸りになれば、あとは何でもありませんよ。そんな徒らな話しなんぞ、暢氣にきいてゐる必要はなかつたのです。」

かう彼はさも齒痒さうに言つて、

「短時間で、要領を得ないといふと、益々相手に乗せられる隙を與へるやうなものですからね。」などと申つて、秋江が二日も費して、我子の緋紗子を伴つて歸ることも出来ないやうな意氣地のない状態を嘲笑ふやうな口吻を洩した。

彼にすると、かうした結果は寧ろ當然のやうに思はれて仕様がなかつた。態々三人の良にかけ

られるために、長い旅程に上つて、のこのこやつて来たかと思ふと、これ以上馬鹿々々しい仕事はないやうな気がして、腹立たしくもあり滑稽な氣もして秋江でも誰でも構はず、嗚鳴り散らしたいやうな心持ちがしてならなかつた。

「ぢやかうしませう、幾ら何を考へたつて、なるやうにしかならぬんですから、最後の方法としてかうしませう。」

かう彼はふと氣を變へたやうにして穩かに言ひ出すと、雪之助には責められるし、一方の方では散々な目に遇つて、すべてを投げ出して住舞ひ度いやうな氣になつてゐた彼女は、今にも泣き出さんばかりの顔をあげた。

「ぢやかうなさいまし、あなたからね、最後に只一度だけ、一言言ひ遺したいことがあるから今朝直に、今から緋紗子さんに來て下さい、此方は疲れて寢込んで仕舞つたから、一人で來て下さい、かう言つて使ひをやつて御覽なさい、それはあの人のことですから、屹度やつて來ます。」

雪之助はさも自信のあるやうに言つてきかなかつた。

「直接私から最後の斷判をして見ませう、それで承知しなければ、あなたも、あの人を見限つてお了ひなさい。」

かう言つた彼は、反抗心で燃ゆるやうな眼をしてゐた。

一三〇

其夜秋江は疲勞しきつて早く床に就いたが、雪之助はまだ容易に眠られさうもないと言つて銀座の夜店をぶらついたたり、カフェーライオンに入つて獨り淋しさに酒を煽つたりして歸つて來たのはもう一時近かつた、旅館ではもう店の戸を閉てきつて、番頭なども寢床に入らうとしてゐるところだつたが少時間すると、その番頭が遽たゞしく驅け上つて來て、今到着ばかりの電報を彼に渡して行つた。

「へえ、何？ 電報か。」

夢のやうに小耳に挟んでゐた秋江は、それでも留守にした京都の家の容子が氣になつてゐた時だつたので、深い眠氣を強ひてよび覺して、かう頭を擡げた。

「いえ、何、私に來たのです。」

雪之助はかう素氣なく答へて披いて見ると、それは思ひも掛けない、お竹から打つて寄來したもので、中には、ナミコオホケガ、キトク。といふやうな意外な文言が認めてあつた。彼はちいつとそれを凝視しながら硬ばつたやうな表情をしてゐたが、それをまた異様な眼付で此方を眺めてゐる秋江の視線に氣がつくと、彼は咄差に思ひ決めたやうにして、それを秋江の枕元に持つて行つて見せながら、「奈美子が、何か怪我をしたんでせう、それで危篤といふのでせうか知ら。」かう彼は努めて平靜を粧つたやうな、落ち付いた聲音で言つてゐたが、併しその眼には言ふに言へない苦悶らしい態がありありと見えてゐた。

「あ、奈美子ていふと、あの人えな。矢張り交際して居るの？」

「え、他に親類もない女ですから、普通にして交際してゐるんですが……。」

かう彼は苦しい辨解をして、而して何か頻りと深く考慮へこむやうな、立つても居てもゐられない激しい焦慮を感じるやうな、例平靜を失はない彼としては、如何にも不思議なやうな表情を彼女の前に見せてゐたが、

「しかし、困つたなあなぜまた大怪我なんぞやつたのかなあ。」

かう言ふうちに、酔も何もさめ果てたといふやうに、次第に冷たい沈痛な顔色になつて行つた。「まあ、危篤なんて、よつほど、酷い怪我えな。」

秋江も、それに調子を合しながら、彼女らしい鋭敏な、さぐるやうな眼付をして、さういふ雪之助の容子から、奈美子と彼とのたゞならぬ仲を想像したり、京都に居る時に、毎夜のやうに出て行く彼の、その相手の女に奈美子を持つて行つたり、又は澤田の忠告などをそれとなく思ひ浮べたりして見るのだつた。さう彼女が疑つて見ると、疑はしいふしは幾らでもあつた。緋紗子に對しても、彼が深く熱望を懐いてゐないらしく、まるで利慾な仕事でも始めるかのやうな、冷淡な態度を見せつけられる度びに、彼女は不圖彼の誠意を疑つて見るのだつたけれども併しそれは女には比較的冷靜な性の男だらうとも思つて、秋江はあまり其處へ心を集めてはゐなかつたのだつた。しかし今にして考へると、怪しむ可き點がまだまだ他に幾らもあるやうな氣もして來た。

「早速、あんたは歸つてあけんなりまへんやろな。」

かう秋江は探るやうな眼をしてきくと、

「え、女ばかりで、嘸困つてゐるだらうと思ひますけれども、併し明日緋紗子さんの會見を濟ま

せて、それから歸つても宜敷いんです。」

「矢張りあんたが歸つてお上げんと、不可んのやろな。何ぞ、もつと深い理でもあるのやないの。」

かう秋江はもう壓へ切れないといふ風にして、露骨に問ひ迫つたりした。

雪之助も、さう何時までも奈美子の關係を包んでゐることは男らしくないことにも思はれて來たので、秋江が蛇のやうな薄氣味わるい眼をしながら、問ひつめるのを機會にして、今日までの紛糾を悉く話してきかせやうかと思つたが、猜疑に富んだ嫉妬ぶかい彼女が、それを聞いただけで、それはそれとして、平氣で濟して呉れそうにも思はれなかつたので、彼は打明けるやうな、半ば秘密にするやうな不徹底な態度を餘儀なくしてゐた。

「もともと、先方では、結婚を要求してゐるんですけれども、此方のこともありますから、好い加減に放棄つてあるんです。此方に私が全然引取られつちまふことを、最近には知つたやうでしたから、一時は諒めたやうなことを言つてゐました。何しろ孤獨ですからね、さういふ縁談は別にして、親類として交際つて欲しい意思もあるのです。」

かう彼が出鱈目をいふと、

「さうか、まあ、そんなら一遍歸つて、容子を見て來とお吳なはい、あんたも、氣になつてゐるにもゐられんやろさかい。」

秋江は、彼のその不徹底な辯解では、容易に信じないらしい顔付をしてゐたが、果はかうも嫌味らしいことを言つて、拗ねて見せるのだつた。

一一三

その翌朝、緊張した顔をして、小さい手提鞆を一つさけて、雪之助は東京驛構内に姿を現はした。而して彼は遠しく入つて來ると、京都行の旅券と急行券とを買ひ入れて改札口の開くのを待ちかねたやうにして立つてゐたが、その間も彼は頻りと周圍に心を配らずにはゐられないといふ風に見えた。

彼は全く、例の彼自身の平靜も打算も失つて仕舞つてゐた。何が何だか自分でも判らないやうになつてゐた。今日まで嘗て覺えたことのない混亂の中に自分を見出さねばならなかつた。ナミコ、オホケガ、キトク、といふ第一の電報を手にした時までは、彼もそれほど惑亂してはゐるなか

つたのであるが、第二の電報を受け取つた時から、すっかり彼は狼狽して仕舞つたのであつた。秋江が漸く寢りに入つてから、彼は自分に當がはれた隣室に入つて寢やうとすると、また京都から打つて寄來した、第二の電報を受け取つたのである。それには「キトク、スグカヘレ」かう極めて簡單に記してあつたけれども、その差出人の名がお竹であるのを見ても、一度ならず二度ならず同じ文言で打つて寄來すのを見ても、彼は流石に落付いてはゐられないやうな氣がした。「困つた、困つた。」かう思つて、彼は蒸し暑い閉めきつた室の中で、頻りと手を拱いて考へたり自棄氣味に舌打をしたり、太い溜息をついたりして考へあぐんだ。けれども流石に彼も凝とこの儘落付いて濟しては置けなかつた。

「カヘルマデ、カンゴ、タノム」かう彼は返電を打つてやらうと度々考へて見たけれども、さういふ電報の簡單な返事で、放棄つて置く自分の處致を考へて見ると、餘り快よい氣持ちはしなかつた。それに、而した自分の冷淡な仕打に對する、お竹や奈美子の思惑を考へると、矢張り心持ちはよくなかつた。そればかりでなく、自分が此方に出發するときにも、奈美子の同意を得ないばかりか、一層疑惑のたねを與へてゐることについても、彼は頻りと心にか、つてゐるが、今自分が

歸つてやらないとなると、勢ひその疑惑を深くするやうなものであつた。

それほど、彼はこの奈美子の危篤といふ電報を信じてゐた。否信じるばかりでなく、彼はこのことが、何な風に行はれたものであるかを想像することが出来るやうな氣がした。必ずこれは奈美子と、その血眼になつて探し廻つてゐる相手の男との間に行はれた争鬭の結果だと思つた。それは確かに疑ひのない事實だと思つた。自分の留守中に、その男は待つてゐると言はぬばかりにして、そつと忍び込んで來たものであらうか。而して頻りと奈美子を口説き落さうとしたが、それが反對に奈美子から散々の悪口をつかれて、積日の恨みに嚇となつた相手の男は、そこに忍びに忍んでゐた遺恨の刃を引抜いて迫つて來たものに違ひなかつた。

「おのれ。」かう言つて斬り付けて來る男の物凄いやうな氣がした。つゞいて彼は、散々に斬り捲られて、朱に染まされた姿すが、彼は眼に見えるやうな氣がした。つゞいて彼は、散々に斬り捲られて、朱に染つた彼女が、どつとそこに打倒れたまゝ、頻りと自分を呼ぶその悲惨な聲も、その悲鳴も、體と心の傷手に耐えかねてうめきつゞけるその苦悶の態も、何も彼もはつきりと眼に見えるやうな氣がした。

「失敗つた、失敗つた。」

かう彼は言ひつづけて、寢床の上に寝たり起き上つて見たりした。

「矢張りさうだ、その男にやられたんだ。」

かう思ふと、彼は嚇と心が燃えるやうな気がした。怒と恨とで、自分もこの復讐に一撥射ち放つてやらねばならないやうな気がした。

「酷い奴だ、酷い奴だ。」

かう彼は頻りと呟きながら、殺氣に充ちた眼付をして、ちつと腕を拱いて、又してもその二通の電報を膝に披けて眺めてゐた。

次第に彼は居ても立つてもゐられぬやうな焦慮とした自分をそこに見出したが、それと共に、今日まで嘗て覺えたこともないやうな、奈美子に對する激しい強い執着と、憐憫との不思議に心に燃え盛かるのを覺えた。

彼はその夜、僅かに疲れて寢入つたが、その幽かな夢にも、泣き叫ぶ奈美子を小脇に臂と抱いて、頻りとその相手の男を斬りつけてゐる自分を見たり

彼は今日まで、かうまで熱狂した自分を見たことはないやうな気がした。女に對する愛着も、かうまで激しくなる自分を見たことはないやうな気がした。

もう彼は矢も楯も耐らなかつた。寸時も早く、女の許に歸つて行かねばならないやうな気がした。一方から考へると、それどころでない、生命の瀬戸際にも似た、今の場合はあつたけれど、けれども、かういふ危険を冒して、あらゆる潔くない眞似をするのも、みなその原は彼女の爲めであるやうな気がした。それもこれもみな彼女の爲めだ、彼女の愛のためだ、彼は思はず

にゐられないやうな気がした。

かうして彼は遂々其翌朝、眠氣と疲勞とでぐつたりとした體を抱きながら起き上つて、適しく仕度を整へると、この朝の特急に乗り込むべく、大急ぎで宿を出て來たのであつた。

勿論彼は秋江に一言語ひ遺さねばならぬことも知つてゐた。さうしなければ、あの猜疑に長けた秋江が、あとで酷い復讐をするであらうといふことも知つてゐた。けれども彼は更に考へるとこの場合強て無斷で飛び出さなければ、一言それをこわつたが最後、どんなに妨けられて怨まれて退つ引きならぬ目にあはされることも考へねばならなかつた。止を得ず彼は黙つて、忍ぶや

うにして、其處を出てゆかなければならなかつた。

一三三

雪之助が、萬事を秋江に任せて逃げるやうにして歸つて行つたあとへ、緋紗子は母の迎へを受けて素直に一人で訪ねて來た。彼女は一昨日電話をかけると、雪之助が電話口へ出て來たので、今日も亦母の傍で、彼の口から、いろいろと不快な差出口をきくことを覺悟してゐたが、幸ひに彼の姿が見えないやうであつた、母に訊くと、

「先へ歸るちうて、番頭に言ひ残して、今朝無斷で京へ歸つて了ふた。」

秋江は正直にそれを告げた。一昨日彼女は田中の家へ訪ねて來た時のやうな、而して泣いて、半狂亂のやうになつて、彼女を苦しめた母とは思へぬやうな、元氣のない、悄然とした容子をを見せてゐた。緋紗子はそれが何事かあつた後にちがひないと思つて、雪之助の俄に歸つて行つた理についていろいろと訊きたゞしたが、秋江はそれに就いては何事も明かさずにさも沈痛な面持をして思案に耽つてゐた。何となく、すべてが、その氣分が、例とはちがつて見えた。全く、二二

人の間に何か起つたに異ひない、と直覺せずにはゐられなかつた。

「京都の家に何か事件が出來ましたの、それであの人が先へ歸りましたの。」

かう緋紗子は正面から訊いて見たが、秋江は明晰とした答へを與へなかつた。

「人といふものは、信用の出來んもんえなあ、私は今度で始めて、いろいろと思ひ當つたことがある。人には迂濶りと誠が明かせんもんえなあ。」

などと、何か深く深く心に考へるところがあるらしく、かう例の秋江とは違つたやうなことを言ひ出した。

「まあ、さう？ で、何をなすつたの、何か人にお欺されになつたやうなことでもあるの。」

母の、その言葉は、或は自分に對しての當てこすりではないかと思つて、緋紗子は用心らしい眼付をしてゐたが、さうではなかつた。母のいふのは、何うやら、雪之助に對する諷刺らしかつた。

「あ、あ、もう此世がいやになつた、人は信用が出來やへんし、思ふやうにはならんし、みんな自分が悪いのやろけれども。」

「でも母様、何故そんなに俄に悲觀したやうなことを仰しやるの。思ふやうにならないと言へば、私だつてさうですわ。」

かう緋紗子は慰めかねて、そんな風にものをいふと、

「あゝ、さうやなあ、お汝もさう思つてゐるやろな、お母様も然う思つてゐるさかいな。けれども、二人はよう考へると、元々運が悪いのや、何うせか、思ふやうにならんやうに、生れて來たのかも知れやへん。」

「まあ、母様、一體何うなすつたの、例のやうに、元氣になすつた方が好いわ。」

「さうかて、つくづく世の中が嫌になつた。」

かう言ひながら、何か知ら胸を衝いて思ひ悩ますものがあるらしく、ちいつと俯瞰してゐるが、頓て秋江の膝には大粒な涙が、ぼたぼたと雫して落ちて來た。

「まあ、母様、何うなすつたの。」

緋紗子は、その母の膝に飛付くやうにして摺り寄つて來ると、直と兩手を伸ばして、瘦せた肩を擁き抱へながら、頻に言葉を盡して慰めたのであつたが、さうするほど秋江の悲しみは一層甚

くなると思へて、容易にその不思議な涙は止まらなかつた。

「やつぱりお母様が悪かつたのや、今そのことを考へると、急に悲しうなつて來たのでなあ。私は今漸うそれに氣が付いたやうに思つて來たのやさかい。」

秋江の言ふことは、緋紗子にはよく呑みこめなかつたが、母が徒らに涙を流してゐるのとも思はれなかつたので、彼女は苦しさに溜息を吐きながら、然ういふ母の顔をちいつと見守つてゐた。

一三三三

「けれども、なあ緋紗さん。」

かう秋江は改まつた口調にかへりながら、涙のあとの紅く充血した眼で彼女をちいつと見据ゑた。

「お汝に改めて私から謝罪りますがなあ、私は今お汝を無理に何うせうといふのやない、ほんの相談といふ意味で訊くのやが、お汝は何うしても、あの雪之助と二人であの店を受け繼ぐ氣はな

いのか、それは幸雄との約束もあるよつてにか、また雪之助といふ人物が不安心なためやのか、何卒腹藏なく親密な母子の仲の心で、ほんまのところを明してお呉れ。」

「え、分りました。本當のことを申上げますわ。」

今更ら秋江が改まつて言ひ出すのは可笑いと心では思つたがでも獨斷的にものを決定て、あとから強制されるよりは、慫うして靜かに心を訊かれる方が、何れだけ母に對する親しみを増すか知れなかつた。緋紗子は答へた。

「最初つから、私はあの雪之助といふ男には同情は出来ないんですの、何ですか、いやに嫌ひで仕様がないうんですもの、それにあの男は、家を利用するやうな考へで、母様に取入つてゐるに相違ないので、母様とちがつて、私は離れてものを見てゐますから、それがよく分るんですのよ。」

「さうか、矢張りさう思ふちやつたやろな。私もそれは知らんとも言へんのや、何ぜか利用しようと思つて養子に入りたがるのやろとは思つてゐるけれども、けれども一時、さうせんことには、ほんまにあの店は人手に移つて仕舞ふさかいになあ、けれども、お汝がそこまであの男を嫌がるのやつたら、私は今になつて、もう強ひて勧めようとは思はん、お汝の望み通り、あの男のこと



はお母様は思ひ断ります。」

かう言ひ切つた秋江の顔には、稀らしいほど、明確と思ひ定めるところがあるやうに見えた。

「私では、何うせ利用する意りでか、つてるのやさかい、人物が何うかて、悪人かて、一向構はんと思ふけれども、現在

のお汝になつて見れば、又さうも行かんやろさかい、これは一先づ思ひ切つた方が宜いかも判らん。

然ういふ言葉の裏から、又思ひ迷ふやうな考へが、ふと頭を擡げるやうであつたが、彼女は昨夜から今朝へかけての雪之助の態度を思ひ出すと、何とも名状しがたい憎悪の念が湧き上つて来るのだつた。緋紗子との縁談を持ち出す前には、奈美子との關係は、極めて清淨なやうに言つてゐたあの男が、今に引續いて交際してゐるといふだけでも、已に疑はしいのに、昨夜のやうな電報を打つて寄來した先方のやりかたを見ても、又は、それがために、此方の問題などは、もう何うなつても好といふ風にして、あたふたとして歸つて行つた處を見ても、何しても怪しみまするにあらぬやうなところがあつた。澤田が東京を立つ前に、態々忠告した語などを思ひ合はすと、極度に彼を信じてゐた自分が、この上もなく暗愚に見えて來たりした。

「では、母様は雪之助に巧く謝絶つて下さることにになりましたの。」

「あゝ、私から、きつぱり斷るつもりや。」

「まあ、それは母様、本當ですの。」

かう思はず聲を高めた彼女は意外な喜悅でわなわなと身を顫へるやうだつた。熱い球のやうな涙が臉を強く壓して流れた。

「その代り、お汝の言ひなり次第になつてゐるお母様の氣になつて何卒たのみやさかい、一遍お母様と一緒に京都へ歸つてお呉れんかい？」

「京都へ、さうね、えゝ、歸りますわ、あのことさへなければ私は母様の側を離れ度くないんですもの。」

「さうか、それは有難う。」

かう子供のやうに莞爾りとして見せた母の嬉しさうな容子を緋紗子もその場合、涙なしには見えてゐられなかつた。感情ばかりで生きてゐるふわふわした母ではあつたけれども、それだけかうした場合に於ける他愛のない母の心持には、彼女も同情せずにはゐられなかつた。

一三四

お兄様、この手紙を書きます前に一度お目にかゝつて、種々御相談したかつたことや、お心を

伺ひたかつたこともあつたのでしたが、あまりに時間が迫つて來ましたので、お目にかゝり得る、好い機會を捕へることが出來ませんでした。

お兄様、私は、今度如何なることが御座いまして、あの輕井澤で、深い夜霧に身を包まれながら、背丈の長く伸びた夏草の繁る小徑を分けながら、只二人つきり散歩した機のことを私は決して忘れは致しません。あの時、兄様のお誓ひになつた言葉を私は、私自身の靈の糧とも思つて、深く胸に秘めて、而して私が兄様に誓つた言葉の通りに、どんな障礙が來ても突き進んで、その二つの誓ひの實現する日のために、あらゆる努力を盡します。

お兄様、何卒私のこの固い決心を信じて下さいまし、母は、小母様やお兄様の仰しやつた通り雪之助氏と一緒に私を迎へに參りました、そのことに就ては、兄様にも大分御迷惑をかけた容子で御座いますが、私は頑として母の願ひを退けましたら、母は例の通りのヒステリーでいろいろと私や小母様を悩ましたが、でも私は構はず自分の我を主張してをりました。

すると其日母は一先づ旅館へ歸つて行きましたから、翌日兄様へ御相談に伺ふかと思ふ折柄母から使が參りまして至急に會ひ度いと申しますので、私は寧ろ雪之助氏に會つた上で、思ふ

存分、自分の抗議を申込むつもりになつて行つて見ますと、意外にも同氏は母を残して歸つて行つたあとで御座いました、そのわけを母に訪ねましたが、母は何か心に恥づるところがあるやうにして、些かも洩らしては呉れませんが、併し二人の間に何か事件があつたにちがひ御座りません。母は私に申しますには、改めて私に同氏と結婚せよと申しましたが、私は同氏の人物を信用が出來ないからと申して又斷乎として謝絶りました。

すると意外にも、母は、それなら、お汝の望み通り、此ことは母の口から巧く斷つてやらう、已う自分も、つくづく世の中の思ふやうにならぬことを覺つたので、今更ら自分の我を張らうとは思はぬ、此上はお汝の意思に従ふやうにする、とかう申して呉れました、私は嬉しくてなりません。

ですから何卒あのことは、茲にめで度く終りを告げたことですから、御安心下さいまし。お兄様それであることは無事に、私共の勝利に歸しましたがまだお兄様と私との問題については依然として底知れない淵に臨んでゐるやうで、まだまだ何うなるか分りませんけれども、これも頓て屹度屹度、私達の火の如な望が叶へられる日が來るにちがひ御座いません。私は信

じてをります何卒お兄様も、この私の哀れな心をお忘れにならずに、何卒誓ひの成就する日を心から祈つて下さいまし。

ところで、お兄様、私は今から又、あの不愉快な京都へ母のお伴して歸ります。この意氣地のない心をお笑ひ下さいますな。あのことの破れた今日、他に楽しみも望みもない母が、私を東京に残して何うしても思ひきつて歸られませう。私はそれを察して母の望み通り一先づ京都へ歸ります。而してお兄様と小母様とから、改めてあのことについて母を説き落して下さるまで、私はあらゆる努力を盡して、母の側で慰め勞つて母の頑固な心のとけるやうに働く考へで御座います。頓て私の真心が母にも通じ、つひに私の望みを叶へて呉れる日が来るに相違ないと信じてをります。

東京を去るに臨みて

緋紗より

お兄様へ

一三五

この長い手紙を、緋紗子は幸雄に宛て書き残した。而してそれをポストに入れて行かうと思つて二階から下りて下ると、座敷ではお金と秋江とが、中央に坐りこんで、頻りと小聲で話し合つてゐるのだつた。

新橋の旅館を一先づ引あけて、緋紗子の指揮通り、秋江は芝の田中の家で、一夜を泊ることになつたのであつた。汽車は明日の朝の急行を選ぶことにして、

「まあ、一度幸雄さんにもお會ひになつて、それからになすつたら如何です。あの人もこの事についてちや随分心配してゐらしたんですからね。」

かうお金は強ひて幸雄に會はせやうとしたけれども、秋江は今となつて、雪之助との縁談を破棄したからと言つて、平氣に彼に會ふ氣になれなかつた。それではあまりに自分の愚かしさを表白するやうで、如何にしても、此上の屈辱を忍ぶやうな心持がしたからであつた。

「何れ、改めて、私から手紙でも、あの子の得心のゆくやうに話ますさかいに、何卒此度は

あなたさんから、宜敷うお断りしといてお呉れやす。まあ、雪之助とのことがおぢやんになつたときいたら、あの人も喜びますやろ。」

秋江はさういふ皮肉もつけ足して、何うしても彼に會ふことは肯じなかつた。「お會ひになるのがお嫌なら、お止しになつたら好いでせう、お兄様には、私から手紙で詳しく書て差上げますから。」

かう緋紗子が二人の間に入つて取扱すので、お金も不精不精に承知したが、併し何となく、彼女には、それが不安でならなかつた。

緋紗子が二階に上つて幸雄に宛る手紙を書いてゐる間に、お金は秋江を捉へて、何故彼女があまで熱望してゐた雪之助との問題を、一夜のうちに翻したか、その理を訊かうと思つた。明らかな理智もなければ、纏つた意志も有たない秋江ではあるけれども、併しあ、まで夢中になつてゐたことを不意に、掌を翻すやうに破棄するといふことは、何としても信じ難かつた。そればかりか雪之助が、已に先へ歸つたといふことを綜合すると、奸智に長けたその男が、自分の腰を据ゑてゐることに不利を感じて、而して俄に先へ歸つたのではあるまいか、秋江が泌々と涙

を流して、緋紗子に自分の不明を詫びたといふことも、又は雪之助との問題を破棄したと言ふことも、みなその男の入智慧で、緋紗子を安心させるため、孝心深い緋紗子の同情を買ふがため、巧妙にたくらんだことではあるまいか、かうお金は疑ひの眼を瞞つて、汗濁に緋紗子が歸つて行く時、その男はすべての準備を終つて今度はもう緋紗子が泣いても喚いても、再び其處から出られないやうに、ちやんと恐ろしい準備を終つて、而してその男が二人の歸郷を待つてゐるのではなからうか、お金は氣が氣でないやうに思つた。

「ぢやかうしませうか、大變に差出がましいやうですが、緋紗さんに又今度のやうなことがあると私もぢつとして落付いてもゐられませんかから、私がお一人をお送りすることにしませうか、而してあなたが、雪之助に、きつぱりお断りになるか、ならないか、お見届けした上で、改めて緋紗さんをあなたのお手に返す、といふことに爲やうぢやありませんか、でないで、私は本當に心配ですから。」

かうお金は、其處へ手紙を持つて入つて來た緋紗子を見ると、ふと突差に思ひ付いたやうにして言ひ出した。

「あら、小母様も御一緒だと、好いわ、ねえ母様。」
 緋紗子がさう言つて喜ぶにも拘らず、秋江は快よからぬ顔色をしてゐた。

一三六

秋江が、湯殿に入つてゐる間にお金は一寸の隙間を見て、緋紗子を二階へ連れて行つた。

「お汝さんも、随分暢氣ぢやないの、私に應へもしないで、京都へ歸る約束をしたんですか？」

「え、でも小母さん、彼れぢや母様に氣の毒ですもの、せめて私でも傍にゐてあげなければ狂氣になりさうですわ。」

「本當にねえ、あの人は、あんまり我慢がすぎるからねえ。」

お金は厄介なことだといふ風に眉根を寄せたが、

「でも、若しか欺されでもしたらあなたは一體何うするつもり、あんなことを語つてゐるけれども雪之助が先へ歸つたのは、何が曰くがあるんだよ、でなきや突然早く歸つて行く理がないぢやないか、それにあの女を置き去りにしてさ、考へても解るぢやないの。」

かうお金は緋紗子の生温い態度を嘲笑ふやうにしながら、頻と彼女の母について歸つて行く、との不利を言ひ張つてきかなかつた。

「ですけれども、母様も大分にあの男の缺點を知つてゐるらしいんですの、始めて夢が醒めたといふ容子でしたわ。」

「然うかい、ぢや大丈夫だらがね、でも、何故急に、そんなに雪之助が信用が失くしたんだらう、何か二人の間に、紛糾があつたんだね。」

「然うかとも思ひますが、よく分りませんわ。私は只、母様の言葉を信用したんですの、たとひ今度歸つて行つて、それが嘘であつても、私は今度は斷然はねつけますわ。さうして、今度嘘を吐くやうなら、私ももう母を母と想ひませんわ、さうまでして、私を陥入れるやうな人達には、何の責任もないんですもの、ですから、もう一度今度だけは欺される覺悟で歸つて來やうと思ひますの。」

かう彼女が固い決心を語つてきかすと、お金も幾らか心が鎮まつた容子だつた。

「さう、それなら、私が従いて行かないとも好いかね。」

「え、お忙しいのに、お氣の毒ですわ、それよか、小父様がお歸りになつてから、あの方のことを決めていらしつて下さつた方が餘程、有難いですわ。」

「あ、それは然うだよ、けれども其處ことを言つて、大丈夫かえ。」
彼女は軽く頷いて見せて、

「若し何でもないつて、母様の言つた通りでしたら、手紙を出しますし、手紙も何にも來なかつたら、私は監禁されてゐるか、何うかですから、その時は兄様か小母さんか、來て下さるでせう。」

などと笑ひながら言ふと、
「それは當然だよ、誰が放つとくものかね、それぢやまあ、仕方がないから、今度は順しく歸らせたいわね。」

かう言つたお金の眼には、又しても數年前に、彼女を京都へ送つて行つた當時の哀しみが、新しく蘇生つて來るやうだつた。

「ぢや、體を大事にして、十分にお母様を慰さめておあげ、あ、云つた厄介な人を親に持つたものも、みんな因縁だからね。」

「え、然うして母様をなだめて兄様とのことを、承知するやうに十分、その方へ心を向けて置きますから、兄様にも、さう仰やつていて下さいな。」

彼女は、自分が再び東京へ迎へられる日の來ることを、繰返し繰返しお金に依頼んだり、誓つたりした。

「小母さんか、小父さんか、出掛けて行つて、大斷判をやつて見せるからね、それまで、出來るだけ忍耐をしてらつしやい。」

「え、え。」

彼女は小母に握られた手を、又力を籠めて握返したりした。

その夜、二人を送るためにお金はお自慢の鰻のフライなどを拵へたりして、欺待した。

一三七

庭樹の上に、窓の硝子戸に、赫と照り付けてゐた夕陽が、頓て紅い残照をのこして沈んで行つたが體の上に差しほつて來る、燃ゆるやうな熱の苦患は、容易に鎮まりさうにもなかつた。白

い壁、白い天井、而うして白い病床の上に、奈美子は身に受けた深い傷手に終夜の苦痛と戦ひながら、その繊弱い痛々しい體を横へてゐた。

その涼しい縁蔭に圍まれた病室は、鴨川岸に臨んで建てられた、外科病院の一室で、彼女が其當時、氣絶から覺めると、深い傷口から來る疼痛に苦しめられて、雪之助の名を頻に呼びつづけながら狂氣の如く泣き叫ぶのを、お竹は吐り付けたり慰めたりして、而うして下宿の主人の手をも借りながら、二人して漸く俾に救け乗せると、直にこの病院へ運び込んだのであつた。

「叔母さん、叔母さん。」

彼女は咽喉の渴きに苦しめられて、幾度か眼を睜きながらかうお竹を呼んで見たが、隣室に細細とつく人々と人の話し聲が微に耳に入るだけで、お竹も看護婦も其處には見守つてゐないらしかつた。

その病室の後方につゞく隣室では、灰暗い電燈を一つ點してお竹は病人の著更の浴衣を、あれこれと整理してゐたが、其處へ待ちに待つてゐた雪之助が、下宿のかみさんから教へられて來たと言つて、ひよつくりと姿を見せたので、彼女は眠つてゐる病人の、變り果てた姿態を一目見せ

るなり、直に隣室に連れ込んで行つた。

蚊が室の隅の方から、不快な唸り聲をたて、頻と二人の體に迫つて來た。

お竹は彼の膝に縋らんばかりに身を近く寄せて、其物凄かつた或夜の出來事を、猛りたつ野獸のやうな男の犠牲になつた、哀れな彼女のことを、細密かに話してきかせた。

「相手は、ぢや澤田だつたの？」

雪之助は、深く思ひ當るやうにして言つた。

「あの人は、人並の考へを有つてゐる人やないさかい、餘程、よう要心せんことには恐ろしいちうて私は何遍、あの娘に忠告したか分りまへん。」

「さうでせう、而うして、相手は殺すつもりだつたのでせう。」

「へい、殺す意りでしたやろ。」

「だが、生命だけは取止めたから好かつたんですね。まあ、それを考へて諦めるんですね。」

彼は、今更何を言ふも仕方がないといふ風に、深く溜息をついて見せた。

「あの娘も些とは頑意地ですわいな、かういふことは分つてゐましたやろさかい、そんな事にな

らぬ先に、男を怒らさんやうにして上手に逃げる方法もありましやろがな。」

「まあ。」

「まだ、何せ、脳が明晰りしまへんさかい、詳しいことは分りまへんが、何でも洋刀の大きな、よう切れる奴を有つてゐたらしいのどす、話しをしてゐる間に、そんなものを有つてゐるか、有つてゐるやへんか分りさうなものどすな。」

「さあ、其處までは分らないでせうね。」

「何でも、私が夕方、一寸立ぎきしてゐると、朝鮮へ一緒に逃げて呉れちうてゐましたが、自分も何うせ、死ぬ氣やつたかも知れまへんえ。」

「はあ、だと、餘程先生苦しかつたんですね。而して、追つたが相手が承知しないから、赫となつたんでせうね。」

「へえ、さうどす、さうどす。」

「而して、澤田は、直に捕へられて行つたの。」

「さうどす。」

流石に、彼女も平氣で口にする氣になれなかつた。訊く方の彼も、ぞつと身の締まるやうな、一種の不快を覺えて思はず顔を背向けた。

一三八

お竹が雪之助に話してきかせたところによると、朝鮮行を迫つてゐた澤田は、只一晚だけの猶豫を彼女に與へて、而して其の日は未練を残しながら歸つて行つたが、翌朝もう早くから押しかけて又彼女の枕元に坐りながら、頻と返辭を迫らしかつた。お竹は其間、傍についてゐるのも反つて圭角を立てる原因だとも思ひ、又全然傍にゐないのも、彼女のために不安でならなかつたので、居たり居なかつたりしながら梯子段の途中で立ぎ、したり、そつと唐紙の外から耳を敲てたり、又は二人の仲に笑聲の洩れるやうな時には、下のおかみさんの室へ息を人れに行つたりして、而して頻と監視の眼を弛めなかつたが、さうかうするうちに、ふと、酷い争ひが二人の間につつたらしかつたので、急いで駆け上つて見ると、腹立しさうに、身を慄はせてゐる彼女の前に、蛇のやうな執拗な眼を光らせてゐた澤田は、お竹が上つて行くと、和と薄氣味の悪い微笑を口の上



した。
お竹は何か言はう
としてもじもじする
と、奈美子が茲に居
るなどやうに眼で仕
方をするので、又下
の室へ返つてゐた。
それから一時間経つ
ても、二時間経つて
も、澤田は容易に歸
りさうもなかつた
が、二人の間は、別
に變つた模様もなく、

何時までも同じやうに鬱陶しい空気がついでいてゐた。するうち夕方になつて、奈美子が一寸下に降りて、いつものやうに行水を使つて、浴衣を着更へて上つて行くと、不意に彼女はお竹を呼んで澤田が注文したといふ、ウキスキーに平野水、それに洋食などを命じた。
男はそれまでに、彼女を外へ連れ出さうとして、晝食も抜いて辛抱してゐるやうだつたが、併し遂々根氣負けがして、其二階で夕餉を始めることにしたらしかつた。
平素あまり酒を嗜まない彼がウキスキーなどを欲しがるのは、何となく不安なやうに思つたが、でもそれをも拒んで却つて男の激怒を促すやうでも困ると思つて、お竹は不精不精にそれらを買ひ整へて歸つて来た。

洋食が来て、一時間、二時間、何のこともなかつたが、聴て夕餉を喰へ終つたらしい頃に、お竹がその片附物を手傳ひに上つて行くと、奈美子は洋食の皿など、幾枚か重ねては次の室へ持ち運んでゐるが、男は眞紅な面をして、熱さうに胸をあけて、而して縁側の近くに寝轉がつてゐた。

聴て十一時がすぎて、下の夫婦は寢に就いたやうだつたが、お竹は其室で寢るにも寢られない

といふので、何気なく自分の煙草を買ひに出掛けて行つた。すると、それがつまり魔がさしたといふことか、止せばよかつたのに、あまり氣になつて仕様がなかつたので、ほんの一寸容子を見て來るつもりで木屋町の我家まで、電車で出掛けて行つた。彼女のつもりでは、四十分かそこいらの僅かな時間だと思ふのに、再び下宿の方へ引返さうとした時には、もう電車は終つた後だつた。折悪く俣も容易に見付からなかつたので、ひた走りに走りつゞけるやうな工合にして、夢中でその下宿へ歸つて見ると、下宿の二階では只ならぬ物音と、人と人との高聲に聳めくのが、彼女の耳に入つた。

驅け上つて行つた時には、奈美子は眞赤な血に染りながら、下のかみさんや、主人や、而して見なれぬ近所の一人二人の人々に介抱されながら、頻と唸り苦悶みの聲をあけてゐた。

一時氣絶した彼女は、直に息を吹き返したが、近所から驅け著けて來た醫師の手で、假りに繃帯をかけて貰つて、而してこの病院へ運び込だたのであつた。

かみさんの話によると、悲鳴をき、付けて驅け上つて行つた主人に對して、澤田は死物狂ひで反抗かつて來たらしかつたが近所の人の一人二人や下のかみさん達が押かけて來るのを見ると、

頓て彼は巧にその人々の間を潜つて、欄干から屋根に飛び出して、而して姿を暗ましたが、けれども翌日の新聞で見ると、澤田は直に自首したやうに記してあつた。

一三九

「私の名が新聞に出てゐるのには驚きましたよ。」

雪之助は、苦々しげに言つて笑つた、お竹は怪訝さうにして、

「へえ、何處でお見やした？」

「なあに、下宿のかみさんが出して呉れたものだから、一寸讀んで見たんですがね。随分詳細に知れちまつたもんですね。」

かう言つて笑つて見せた。

「警察で、澤田がみんな喋つて仕舞ふたんですやろ。」

「え？ さあ、多分然うでせうね。」

かう間斷なしに談話をつゞけてゐると、隣室の方で、病人の眼を醒まして、お竹を呼ぶらしい氣配が洩れてきこえた。

「はい、はい、今行きますえ。」

お竹はまるで赤坊でも勞るやうな聲で返辭をして、いそがし氣に入つて行つたが、奈美子はもう早くも彼の來たことを、雪之助の歸つて來たことを、ひそひそと話してゐた聲音で知つたかして、ぱつちり充血した眼を睜りながら、

「ゐらしつたの？」

かう幽かな聲で訊いたりした。

「はあ、今朝あつちを立つて、直に來て呉れましたえ、呼びまへうか？」

かうお竹は訊くと、軽く彼女は頷いて見せた。

而して彼が、扉を開いてそつと、體を斜に見せた時にはもう、彼女は泳へきれないといふやうに瞑つた兩眼から、薄々と涙を流してゐたが、頓て彼の手が蒲團の襟にかゝつた時には、而して近々と顔を寄せて、慰めの一言を言ひ出した時には、彼女はその涙の眼を強ひて視開かうとして

頬に悶えてゐるたが、只幽かに彼の顔を見ただけで、俄に顔を引歪めて潜々として泣き入つて仕舞つた。

「泣くんぢやないよ、え、體に障るといけなから、泣いちゃ不可ないよ。」

かう彼は慌て、汗ばんだその兩手で直と彼女の顔を蔽つてやつたが、さうされるとなほのと、彼女は高く低く嗚咽しながら、容易に泣き止まうとはしなかつた。

「本當に、氣を確乎りとしてゐなくちやならないよ。決して下らないことを思ひ出すんぢやないよ、え、直に、内臓の方へ廻つて來てそれから取返しにならない病氣になるからね。」

「え、え、でも、あなたに濟まない。」

彼女は途絶途絶にものを言つたが彼はその苦しいなかに、種々の思ひを爲せまいとして、氣兼ねをさせまいとして、頬に慰めたり、言葉を強くして氣を勵ましたりした。

「俺に濟まないことはないよ、俺の方こそ、斯様酷いめに遇つてゐることを知らないから、本當に、一人で飛んだことに爲つちまつたけれども、もう今更何と言つたつて仕方がないから、まあ氣を健固として、能るだけの養生をしなければならぬよ。」

かう彼は言つてゐるうちに、何時の間にか彼自身も涙聲になつてゐることに気がついた。

顫へに顫へて泣きつゞけてゐる彼女の顔を拭いてやらうとして、彼は其處にあつたガーゼーを取上げたが、その序手に何氣なく向側になつてゐる肩の方に眼を落とすと彼は愕然とせずにはなかつた。薄い浴衣に包まれてゐて、赤裸々に見ることは出来ないけれども、太く巻き付けた繻帶で、別人のやうに肥つた肩が、彼女の襟を包むやうにむつくりと持ち上つてゐた。

「うむ、肩先きだつたのだね。」

かう彼がふと不用意に口を迂らすと、彼女は泣きつゞけながら、深く頷いて見せた。

「一つ所？」

「うむむ。」

彼女は頭を振つて見せた。

「脊中の方も突いたの？ みんな突き傷だらう？」

彼は眉根を寄せて痛ましげな眼付をした。

夜に入ると、奈美子の熱は稍下つて行くやうだつたけれども、意識が鮮明になるほど、傷の痛みが強く激しくなり優つて行くやうなので、お竹は頻と看護婦を扶けながら、氷嚢を取換へ取換してゐた。

看護婦や、お竹の居る間は、奈美子も割合に、平靜にして眠るやうなそぶりを見せてゐたが全く人がゐなくなると、雪之助との二人きりになると、彼女は病人とも思へぬやうな、鮮かな意識を取返して、何かと彼に話しを仕向けてならなかつた。

「本當に、茲五六日が大事な體だから、ぢいつと安靜にしてゐなくつちやいけないよ。」

かう彼がいふと、彼女は和と笑つて見せて、

「大丈夫よ、だけれど、肺病になつて、死ねば好いぢやありませんか？」

などと自棄氣味な、彼女らしらことを言つたりした。

「電報を見て、あなたは喫驚なすつたでせう？」

私が自殺でもしたと思つたでせう。然うは思は

なかつた？」

「思はなくもないよ、東京に出発前に會つた時には、大分お汝の容子が變だつたから……。」
 「矢張りさう思つたでせう。私はさう思つてゐましたの、何うせ生きてゐたつて、思ふやうにはならないんだから、寧ろあの男の手で死んだ方が、あの男も怨みに思はなくつて好い、と思ひましたよ。」

彼はそれをきいて黙つて苦笑をしてゐた。

「生きて、かうやつてあなたの顔を見やうとは思つてゐなかつたわ。」

「冗談ぢやない。」

「いゝえ、然う。ほんとに然う思つてたの。」

かう彼女は言つて、何を又思ひ出したのか、ぼたりと枕布に涙を落しながら、ぢいつと哀しげな眼で彼を凝視めた。

「まあ、徒らないことを思はないが好いよ。」

「でも、でも、今だつて然う思ふわ、斯様に、酷い體になつて治つたつて、もう右の腕は自由に

使へないでせう。それだのにあなたは、以前と同じやうに、私にして下さるか何うか分らないわ、あなたは、斯様、汚名を被せられて、それでも私を愛しては下さらないでせう？」

「まあ、馬鹿なことを言はないが好いよ。」

彼は聞くにも耐へないやうにかう強い言葉で吐るやうに、慰めるやうにして言つたが、彼女は言ひかけると容易に言ひ止められぬと見えて、益々涙を流しながら、嗚咽を嚙み締めながら、言ひつづけた。

「東京から歸つて下すつたけれども、あの方のことは、まだその儘になつてゐるのでせう。私が少し快くなつたら、あなたは又店の方へ歸つてゐらつしやるんでせう。」

「まあ、そんな徒らない話は今夜は止さうぢやないか、俺は不愉快で耐らないんだ。」

「でも、でも、私も不安で耐りません。」

「だからさ、信じてゐれば好いぢやないか、第一こんなことがあるのに、俺も平氣で店に歸つても行けないぢやないか、ちやんとあの方は斷る意りで歸つて來たんだよ、それにこの問題は、奥さんが考へるやうに、さう一朝一夕で成立や爲ないんだから實は自分としても飽々してゐるん

だ。だからまあ、あの方は一段落だ。」
 かう彼が明瞭に自分の心持ちを話してきかすと、最初は、その眞偽について、何れとも判断しかねて、頻と思ひ悩んでゐた容子であつたが、更に彼が言葉を盡して説明すると、始めて、彼女は得心が行つたといふ風にして、如何にも安心したといふ風にして、靜かに笑顔を見せながら頷いた。

一四一

「もう、ほんとにお寢み。俺も彼方へ行つて眠るから。」
 雪之助が、かう言つて側を離れやうとすると、奈美子は細い腕を伸ばして、固く彼の袖を掴んで放さなかつた。

「まだ早いよ、ちつとも眠たくないの。」
 「困るねえ、それが何よりも悪いんだよ。神経を亢奮させないのが何よりの養生なんだからね。」
 「ですけども、心の中で種々のことを考へ續けてゐるのも、あんまり好くはないのでせう。だ



から後生だから、
 もう少し茲に居て
 ……私の得心が
 出来るやうに話して
 きかせてね、
 ね。」
 彼女は他愛のない
 子供のやうに頻
 りと談話を懇願
 だ。
 「で、何を話して
 きかせるのだい、
 明日でも、明後日

でも、何日でも好いちやないか？」

少し彼が色を荒くして言ふと、

「だつて、あなたは、さう毎日も訪ねては来られないでせう。」

「来るも来ないもないよ、叔母さんにはかり委しても置けないぢやないか。」

「然う、ぢや、暫く側についてゐて下さるの？」

「あゝ。」

「まあ、本當？」

嬉しさを聲に出して彼女は言つたが、直に又顔を曇らして、

「茲へ来た翌日、警察の人が私を調べに来たの。あんな嫌なことはありませんでしたよ。」

彼女は今またその時の、光景を思ひ描くやうにして、ぢいつと眼を空に据ゑてゐた。

「併し、考へて見れば、澤田も可哀さうだね。」

彼は何氣なく言ひ出すと、ちらとその顔を偷み見た彼女は何か心に咎めることでもあるやうに、眼を伏せて、ぢつと深い沈思に耽つてゐたが、

「でも、何故自首なんぞしたんでせう。矢張り、死ぬだけの覺悟を有つてゐなかつたんだわねえ。」

かう言つて、ふうと溜息を洩らした。

「何う思つて、自首したのかねえ、氣の毒は氣の毒だね。」

「それに、自首したんですから刑は屹度輕いでせう。だと、なかなか諦められなくつて、又怨みを返しに来るでせうか、私、昨夜なんぞ、それや嫌な夢を見たのよ。」

「馬鹿な。」

彼は力強い聲でかう吐り付けはしたが、でも言ふに言へないやうな不快な感情が、重く胸を壓して来るやうな感情が、鉛のやうに流れ込んで来るのを覺えた。

「ですけれども、此方さへ堅固にしてゐたら好いのだわ、少々のことがあつたつて怖ろしくはないわ。」

氷が早くも解けかゝつて来たかして、彼女が靜かに頭を動かす度に、氷枕は軟かな水の音を立てた。

「でも、病院に長く入つてゐなければならぬとすると、大分費用がかゝりますわねえ。」
不圖また彼女は斯様ことを言ひ出した。あとからあとから、間斷なしに種々のことを思ひ煩ひながら、かうした苦しい病褥に横はつてゐるのも、なかなか耐へがたいことだらうと彼は思つた。

けれども然ういふ彼女の心配を、彼は一言にして退けることも出来なかつた。今の彼には然うした物質のことについて、あまり言ひ度くはなかつたから。

「東京へいらつしやる前に、お預りしたお金ね、あれは随分澤山なお金ね、あれは叔母さんに預けてありますから、あなたにお返しするやうに、然う後で言つて置きますわね。」

かう彼女が言ひ出すと、彼は慌て、手を振りながら、

「いゝんだ、いゝんだ、あれは此方に要らないんだから、お竹さんに預つて貰つてゐる方が好いんだよ。」

かう彼は張く言つて胸に集まつて來る暗い影を、強ひて拂ひ退けやうとした。

一四二

僅か一月足らず家を空けてゐるに過ぎなかつたけれども、けれども彼女の眼に映るすべてのものが何となく新しく、而して親しみがたく感じられてならなかつた。

緋紗子は、體も腦も鎔けさうな熱い日盛り時を、軽い明石縮浴衣に着更へて、縁側に籐椅子を持ち出して、新刊の雑誌を披いて見たり、烈しい日光を光けて葉を巻返してゐる朝顔に、手洗水を降り注いでやつたりしては、倦怠い、息苦しい晝の一時を過ぎしてゐた。

枝も葉も、伸しに伸した大きな古楓が、ちかちかと銀色に光る眞夏の空を塞いで、水の雫するやうな深い綠蔭を作つてゐた鏡の面のやうに黒く光る縁側には、木の姿や、杉板で集めた建仁寺垣などが、靜寂の眞晝の姿態を描くやうに、ぢつと其處に集めてゐた。

彼女が、琴の師匠の許に行くと言つて、朝早く、まだ裏庭の草の上に露がしつとりと濡れ搦んでる頃に、そつと人々の眼を忍んで抜けて出たが、それはもう一月近くも前のことであつたが、その頃には、かうして咲き溢れてゐる姫萩も、まだ蕾すら見せてゐなかつた、白百合は細い薄の

葉に交つて、俯向き勝に咲いてゐた。

緋紗子の居る間は彼女に追ひ立てられて、店の小僧なども面白半分の手傳つて、草抜きなどするけれども、一體に構ひ付けない秋江は、茲にこの上長く棲めるか棲めないかも分らないとでも思つてゐるかして、庭樹と庭樹との間に背丈けを伸してゐる雑草すら、引抜かうともせず、掃除一つさせるでなかつた、背の高い春日燈籠の笠石の轉がつてゐるのも、幾日か汲み出さない、庭井戸の水の濁つてゐるのも、みな彼女の眼には不快に寂寥に感じないではゐられなかつた。

たとひ十日でも二十日でも、快よく住んで、快よく引拂つて行き度い、かう緋紗子は考へてゐたけれども、秋江にすると、あれこれと手入れをして、住心地を優して、さうして傳手に渡す時の口惜しさを考へねばならぬかして、緋紗子が如何様にすゝめても、容易に承知しなかつた。庭も家の中も荒れるに任してゐた。

歸つて来て四五日は、緋紗子も室の中をあちこちと掃除したり、女中に手傳はせて床の飾り付や、客に備へる道具まで、夏らしく趣きを變へて、いろいろと働いてゐたが、秋江の機嫌が然うするたびに甚く悪くなるのを見ると、好加減にして切あけて仕舞つた。

「かうして荒して置くと、自然に此家がいやになるさかいに、さうするまで、かうやつて掃除もせんと放置のや。」

かう秋江の、自分の執着心を失ふために、様々に苦心をしてゐるのを見ると、緋紗子は苦笑を感じながら、その上強て彼女の意思にさからひたくもなかつた。

ふと紺色の蝶々が、日蔭を求めやうに縁側深く入つて来て籐椅子の上に羽根を休めた。微笑みながら眺めてゐる彼女の眼には、ゆくりなくも、輕井澤のあの夢のやうな夏草の繁る廣い野がまざまざと描き出されて来た。

夜霧の深くけぶる中に、向うの行く手に一天紅く帯をひくやうなのは、淺間山の噴煙だつた。寂として聲を収めてゐる、暗い夜道の下に、あちこちの窓から明りを輝かせて、浮び出てるホテル、眞黒な森、白い夜霧、それらは涙の出るほどなつかしくも思ひ出されて来た。

「歸りたくないな。」
などと云つた幸雄の言葉も忘れずにあつたが、始めて周圍の煩累から離れて、自由な愛と真心とを見せて来た幸雄のその心持ちを考へると、彼女は熱い涙が臉を壓して来るやうに感じた。無

暗に彼が戀しかつた。

一四三

「緋紗さん、緋紗さん。」

彼女は然う呼びつゞけられる聲に、夢のやうな美しい思ひ出から、ふつゝりと斷り放たれて、思はず椅子の上に固くなつた。

「えらいことが起こつて来た。」

秋江は然う言ひながら入つて來ると例のやうに暗い面持を見せて、

「雪之助が、東京から歸つてから顔を出さん筈やないか。」

と、言ふ。

「はあ、何か理が分りましたの？」

「い、え、分つたところかいな、酷い男やな、店の時計を一つ賣つて、その金は先方から受け取つたまゝ、店へ持つて歸らへんし、又ダイヤの指環を、問屋から受け取つて、それも帳面につけて

ないのやと。」

「まあ、それや大變なことをしたものですわねえ、ですけれども、それは本當ですか、何うして分つたのです。」

「分らうかいな、今日は記き出しをする日やもん、小僧が持つて行つたら、二軒とも支拂ふたといふて受取書を出して見せはつたと言つて、問屋の方からは電話で、さう言つて來たと。」

「何うして電話なんかで言つて來たんです？」

「問屋の方に、そんなことでもしてゐるやへんか、調べて見たんや。」

「ぢや矢張りやつてゐたんですわねえ。」

「今日まで、ちよいちよい、つけかけしたり、現金賣を瞞著したりしてゐることは、よう知つてゐたけれども、豈夫、こんなことまでするとは思はなんださかいな。」

「少しあの男にしては贅澤なところもありましたから、私は母様に然う申し上げやうか知らと、思ひましたけれども、黙つてゐましたのよ。」

「贅澤ですて？ それは何様ことかいな？」

「一寸言つても、いやに風采を構つたり、始終外へ出ては、お金を消費つて来る容子だつたぢやありませんか。」

「あ、それは然うやつたけれども、こんなに、大きなことをするとは思はなんださかいな。」

「で、お金は何れ程？」

「問屋のが千圓、店のものが五百圓と五百圓。」

「では二千圓ですか。」

「彼女は少し笑ひかけて、

「問屋の方は、矢張り家から拂はなきやならないでせう、もうそれは賣つて了つたものでせうからねえ。」

「そんな大金が拂へますか？」

「でも、拂はなきや、あの男から辨償させることも出来ませんわ。」

「なんで、なんで出来んのや？」

「ですけれども、可哀さうですもの。」

かういふ緋紗子の眼をちらと視て、秋江は聞き辛さうに顔を背向けて仕舞つたが、如何にも耐へがたさうに溜息を深く吐いて、

「こんなことを、幸雄に知られたら、まあ、何様ことになるやろ、何様小言をきくやろ、それを思ふと恐ろしくなる。」

「また、母様も随分徒らないことをお考へになりますわねえ、兄様に知られなければ好いちやありませんか、それよりか、早く此方で仕末をして仕舞ひませうよ、店の方でつぐのひが出来なかつたら、私と母様とで、それだけの責任を果したら好いでせう。」

「まあ、お汝は罪のないことをお言ひるけれども、これから店の商賣も、狭うなる一方やし、費用はかゝる一方やし、そんな大金を出して仕舞うて、まあ一體何うなるのや。」

「い、え、構ひませんわ。」

かう二人が言い争つてゐる時に雪之助を迎へるために、病院へ使ひに行つた店の小僧が歸つて来た容子だつた。

雪之助は、母子が東京から歸つて以來、一度も顔を見せなかつたので、秋江は彼の實家へ人をやつて調べさせたり、始終彼が出入して居たところを問ひ合せたが、分らなかつたので、遂々病院へき、にやることにした。

彼女が其處へ氣が付いた理由はといふと、奈美子があつた被害を受けたことが、當時の新聞に出てゐたので、店の者にその記事を探し出させて讀んで見ると、奈美子が收容された××外科病院の名が出てゐた。

「そんなら、此病院へ電話をかけて訊いて見まへう。」

と、店の者が言ふのを、秋江は引止めて、

「いゝえ、祕しでもすると厄介なさかい、お汝が行つて直接にきいて来てお呉れ、而して雪之助が居たら連れて歸つといで……。」

かう言つて追ひやつたけれども、その使者は今空しく歸つて來たのだつた。

病院には、さうした患者は無論入院してゐたけれども、小村といふ男は、來たり來なかつたりしてその宿所も分らないといふのだつた。

「誰ぞ、付添か、看護婦かに會うてきくとよかつたのに……。」

秋江はその使者の報告に飽きたらなくなつて、頻りと焦れて例の疳癩をつのらせてゐた。

「いゝんですよ、母様、病院に來ることさへ分れば、それで十分ですよ、あとは方法がありますからね。」

緋紗子には二人の問答をきいてゐたが、頓て堪りかねて割つて入ると、かう言つて店の者を加護ひながら、その者を其處から追ひ遣るやうにして、而して秋江と對ひ會つた。

「ねえ、母様、ぢや恠うしませう、私が明日でも出掛けて行つて、雪之助に會つて見て、而してよく話してきいてから、我家へ連れて歸りませうよ、然うする方が平穩に濟んで、而して世間にも知れないし、づつと恰愼な方法ですよ、母様のやうに然う荒立て、お騒ぎなさると、店の者に對してもだらしがなくつて不可せんよ。」

如何にも母の爲ることが、彼女には眼にあまつて仕様がなないので然う強く言ひ張ると、秋江は、

「そんなら、お汝が行て呉れるのかてほんまに。」
かう半ば疑ふやうに、半ば憫れるやうな顔をした。

「え、それに、あの奈美子つて人なら、私一度ばかり見たことがあるんですの。」
「まあ、何處で？」

「お劇で、兄様と二人で出掛けると先方は、澤田さんで行つてました。」

「まあ、そんなら、矢張りその時分から澤田さんのお妾をしてるたのやな。」

「え、それは綺麗な人でした。澤田と父子ほど異ふんですもの、あとで兄様と二人で問題にして
るたんですのよ。」

緋紗子はその當時のことを、思ひ出しながら母に話してきかせたりした。

「へえ？ 何の因果でまあ、あの二人が、そんな女にかゝつたのやろな。」

秋江は考へれば考へるほど、情けなくもあり、空恐ろしくもあつた。時としては雪之助に對する
信頼が、まだ深く根を持つてゐて、むらむらとした謀叛心が、その半死の状態で寝てゐる女か
ら彼の體を無理に奪つて來やうかと、思ふやうな恐ろしい謀叛心が、ふらふらとして、彼女の心

を捕へることがあつた。然ういふ時には、何うしても雪之助を悪く見ることが出來なくして、彼
をこんな恐ろしい罪過を行はせたのも、考へて見れば、あの女のために緋紗子との問題が巧く
治らなかつたことに原因するやうにも思はれてならなかつた。けれども亦、ふと彼女も我に返つ
たやうに、冷たい、理性を通してものを考へるやうな時には、あゝした良心もないやうな男に信
頼した自分の愚さが、言ひやうもなく恥しかつたりした。

一四五

丁度其時も、雪之助に對しての憎悪が、火のやうに秋江の心に燃え盛つてゐる時だつたので、
緋紗子が折角言ひ出した言葉も、一遍に葬られて了つた。

「あんたが、態々そんなところへ行かんかて宜敷い、何ぞ他に善え方法があるやろから、よう考
へて置きます、あんな二人の悪い奴にのこの此方から會ひに行かないでも宜敷い。」

「い、え、ですけども、私は少し考へることがあるんですの。まあ、これだけ母様も許して下
さいな、あのお金のことみんな善いやうに解決しますから。」

さも自信のあるやうに、緋紗子は頻とそれを主張して止まなかつた。
 「けれども、相手は強か者の毒婦みたいな女子やないか、そんなところへ飛びこんで、あんたもまあ善い罫り者に會ひますぜ、お金は返らず世間の笑はれものになつて、お母様も、今になつて考へると、あんな奴に欺されたことが、口惜しいやら、腹が立つてならんのやさかい、何卒、そんな馬鹿なことを言はんとお置き。」

かう秋江は頻りと止めてゐるたが併しよく考へると、別に善い方法とてはなかつた。彼を茲に引捕へて来るにしても、誰か、行つて方法をつけて来なければならず、又これを世間的に、警察の手を借りたりなぞすることは、店の名に對しても、さては親戚の手前に對してもあまり好い方法ではなかつたそればかりか、秋江にすると、東京の幸雄やお金などの耳に入ることとも恐れなければならなかつた。

「あの男の實家の義兄でも呼び寄せて、斷判しやうか。」

秋江は思案に盡きて、かう言つて見たけれども、雪之助と義兄との不仲なことや、平日などでもあまり親しく寄り付かないことを考へると、これも餘り効果がありさうにも思はれなかつた。

二人は其處に膝を突合せて、何時までも、何時までも、あれかこれかと考へをめぐらしてゐたが、結局は今日使ひに行つた店の若者が、もう一度、彼の病院に来てゐる時を見計らつて、取り押へに行くより他に方法がなかつた。

「では、明日か明後日でも、もう一度やつて御覽なさいな。」

澁々緋紗子も承知したので、秋江は再び店の方へ引返して行くと先刻の男を呼んで、何か頻と諄々言ひ含めたり、依頼んだりしてゐた。

其夜であつた、緋紗子は蚊遣りなどを焚きながら、岐阜提灯を吊した縁端で幸雄から送つて貰つた新刊の文藝書を差覗いて、何時までも起きて涼んでゐると、秋江の部屋でも、簾垂越しに灯が洩れてゐて、そわ／＼人の氣配などがしてゐた。

大方晝間の亢奮で、秋江も寝付かれないのかと思つて、緋紗子は一寸様子を見に、立つて縁側を廻つてそつと覗いて見ると、其處には思ひもよらず、低い男の聲音がほそ／＼と洩れ聞えていつでも神經の焦だつ時にする急しげな咳拂ひが其時も男の聲に搦むやうに、煩累くきこえて來た。緋紗子は面白半分、足音を忍ばせて、室の中の様子を窺つて見ると、中には秋江と雪之助との

二人きりらしく、闕の端近く背方を見せて坐つてゐるのは、彼で、斜に秋江の白い浴衣の膝が見えてゐた。あまりに聲が低いので、よく聞き取れなかつたけれども、癩癩だてゐる秋江の態度に對して、男が低く低く同じ調子で、靜かに語りつけてゐるのを見ると、彼が只管、犯した罪を謝してゐるのか、辯解をしてゐるのか、何れにしても、あの横暴を極めた秋江に對しても尊大に構へてゐた、以前の雪之助とは思へぬ程、穩かに秋江に相對してゐる様子だつた。

と、それに答へるらしく、
 「ぬけぬけしたことをお言ひたかて、私はもうちやんと知つてますえ、な、最初から、あんたが私等を欺す氣でか、つてお居たことも解つてゐますえな。」
 黄色い、焦々した秋江の聲がそこについた。

一四六

其夜、彼が容易に歸つて行きさうにもなかつたのと、其うち秋江の聲もだんだん靜まつて、態他から調停に這入つて行かねばならぬ程、争ひも激しくなりさうになかつたので、紗緋子は好

加減にして寢て仕舞つた。

すると、その翌朝、緋紗子は朝餉を濟ませてから、母の部屋へ新聞を持つて這入つて行くと、
 「まあ、一寸お坐り……。」

かう秋江は小聲で言つて、他聞を憚るやうに、彼女に寄り添ひながら、昨夜雪之助が訪ねて來たことや、而して彼と自分との間に起つた言ひ争ひなどを細々と言つてきかせた。

「へえ、でも大分順なしくしてゐましたわね。」
 緋紗子が言ふと、

「あ、今更ら何の言ひ譯もせうと思ひません、あなたまでが私をそんなに疑つて下さるのは、みんな過去にした罪の罰です。なんぼ私でも、お二人を欺す意りでか、つた仕事ぢやないので。只それだけ、此際、一言あなたまでに申上げて置きます。こんなづうづうしいことを言うてゐよつた。」

「まあ、然うでしたか、でもそれが本當かも知れませんが、あんまり母様のやうに、喧しく責めてやらない方が好くつてよ、あの人よりか、奈美子つて人が可哀さうなんですもの。」

「ほうしたら、あの金は何のために偷んだ、とやうてやつた。それには、よつほど答へられないと見えて、黙つてぶるぶる身を戦はせて、鼻をすゝり上げすゝり上げしてゐよつたが、それには私もしやな思ひがしたえ。」

「あら、まあいやでしたわねえ。」

緋紗子にも思はず顔を顰めた。

首を垂れて、涙を呑みながら醜い自分の罪状を告白しなければならぬ男の心持を考へると彼女は只不愉快な思ひばかりでもなかつた。

「で、母様は許してお遣りになつたこと？」

「いゝえ。」

と、秋江は頭を揺つて見せて、

「何程私が馬鹿でも、欺されてお金を盗られて、それで平気で済まして置けるか？ あんたも間拔けたことをお言ひるな。」

彼女は嚇として頬を紅らめたが、でも、その心持を秋江に説明してきかせた處で、深く了解し

て呉れさうもなかつたのでそれなり黙つて俯向いて了つた。

秋江は言ひ續けた。雪之助は暫く其處に身を慄はして、眞蒼な顔をしてゐたが、頓て彼は懐中から二百圓ばかりの金を取り出して其處に置いて、折角あゝして作つた金も、奈美子の入院のために、大部分を費用に使つて仕舞はねばならないから、それを差引と僅かに之丈けしか残らない、奈美子の今度の災難も身から出た錆ではあるけれども原はと言へば自分のためでもあらうから、せめてあの傷口にだけは、完全に治療して遣り度いと思ふ、それと言ふのもみなあの金のお蔭だから此御恩は生涯を通して忘れないから、と言つて彼は泣いた。

ところでその金は今後必ずお返しするから、何卒正式の貸借關係にして貰ひ度い、自分達二人は全く此金によつて救はれたのだから必ず此恩に背くやうなことはない。かう彼は言つて、涙を流しながら只管に依頼んだことを秋江はそこに思ひ出した。

「さう、で二百圓は何うなすつたの？」

緋紗子が訊くと、流石に彼女は一寸きまり悪さうに微笑を洩して「二百圓は、病院の費用を差引いたあとやといふさかい、此方へ取つといた。」

「でも、まだ病院に入つてゐるんでせう、好い加減見積つたんでせうが、又要るかも知れませんが、からそれも貸してやればよかつたんですわねえ。」
 緋紗子は然うも言つて、懺悔の涙を流して行つた男の心持ちに、染々同情するのだつた。

一四七

青く澄んだ鴨川の水に、白く乾いた河岸の道に、垂れた柳の枝に朝の美しい日光は、眩曜いやうにちかちかと照り輝いてゐた。緋紗子は俣の日蔽に身を祕して、涼しい風の吹き流れる河岸を通つて、××外科病院に、奈美子を訪ねて行つた。

玄關の廣間には、暑さうな白衣に身を包んであちこちする看護婦や、蒼白い硝子戸や、松葉杖の患者、長い腰掛、さういふものが、ごたごたとして、静かな外から這入つて来た彼女の眼を刺戟した。

「お見舞ですか？」

かう受付の看護婦は彼女に言つて見て、暢氣に椅子から身を起こして、派手な明石に緋の帯と

いふ艶やかな彼女の姿を後に随へながら、奥まつた奈美子の病室へと案内して行つた。

其朝、繻帶交換を終つて一息つきながら又静かに仰臥してゐた奈美子は、付添室となつてゐる隣室に、つねにき、馴れない女の聲を聞き付けて、思はず耳を欬てゐると、頓て、扉を僅かに開いて、そつと抜けるかのやうに入つて来たお竹が、いくらか面色を變へたやうな調子で、そくそくと寢臺の近くに忍び寄るやうにして、

「龜井さんのお嬢さんが、一寸お見舞に上りました、御病人さんにお目にかゝり度いつて。」

「さう？ 其處に、來てゐらつしやるの？」

「はあ、何うしまほう。」

「ちや一寸其處いらを片付けて而して入つて貰つて下さいな。」

「然うか通しませうか。」

かう言ひながら、お竹は遽だしけに、窓のカーテンを引縛つたり、椅子の位置を直したりしてゐたが、長く彼女を外に待たせても置けない、といふ風に、頓てそゝくさと扉を開けると、改まつた調子で、そこに淑かな姿態で立つてゐる彼女を迎へ入れた。

其姿を見ると、奈美子も息苦しさうにしながら起き上らうとすると、
「あら、何卒、何卒そのまゝにしてゐらしつて、飛んだお邪魔に伺つたやうで、私もそれぢや困りますから。」

などと頻と手で制して、而うして一寸來意を述べて挨拶をしたりした。

何となく、年齢の若い緋紗子に機先を制せられたやうな、一種の不快感も、奈美子の方には在つたけれども、満更ら初対面でもなかつた二人は、少時間話しを交すうちに、直さうした窮屈な感情は流れ去つたやうだつた。此春、劇で見た時の印象などを喚起すと、奈美子にも泌みりした懐かしさが、いつともなく湧き上つて來るのを覺えた。

「傷の方は、でも大分お快しいやうですか？」

「え、もう外部の痛は除れつちまひました。でもまだ繻帯を換へます時には、然うでも御座いませんの。」

「でも、まだ衰弱しておるでになりますわねえ。」

「え、あんまり種々なことを思つて、心を使った故でせうか、肋膜を痛めました。」

「まあ、では大變ですわねえ。」

「ほんの初期ですから、大したことはないんださうですけれども、まだ熱がよく上りましたねえ。」

「矢張り、衰弱なすつたのと、心配とで、胸に來たんでせうねえ、まあ、それは大變ですわねえ。」

「え、。」
「もつと早くお見舞に伺ひたかつたのですけれども……。」
「何ういたしましたして……。」

かう言つた奈美子の眼には、薄々涙が流れてゐた。

其處へ番茶を入れて持つて來たお竹が、改めて彼女に挨拶をしたりするので、

「お邪魔ぢや御座いません、ほんとに厚かましいでせう？」

などと言つて軽く笑つたりしたが、その彼女の氣の置けない様が頓てお竹の心にも、軟かに溶けて入つた。

「あの日は、お墓にお詣りになつた時にも、お目にかゝりましたでせう。」

かう奈美子にはあの時の思ひ出を話すと、緋紗子は莞爾りとして、

「え、兄様が歸つてゐらつしたものですから、一寸三人でお詣りをいたしましたの。」

「あれつきり、母や弟の墓に詣りませぬのですよ。」

「然う？ 早く快くおなりになつてお詣りになると好いわ、又御一緒しますわね。」

「え、是非。」

「でも胸の方は、なかなか容易にお治りにならないかも知れませぬわねえ。別荘にでもゐらつして、悠然にお治しになると好いわ、それなら、私の方の濱寺にあるのが丁度空いてゐますのよ。」

かう言つて、緋紗子は其處で別荘の静かなこと、岸打つ波に、白く輝く砂、秋夕映の沈んで行くさまなどを、少しばかり話してきかせた。

「まあ、そんなところに行つてれば、書物を読んでも、よく頭脳に入りますわねえ。」

「え、全くですわ、さうさう、貴方も何か讀んだり書いたりなさるのねえ、一二度あなたの文章を拜見しましたわ。何かお書きになるなら、それやほんとに好い所です、私も兄が店を賣るやうに言つてゐますから、母が得心すれば直に、其の方の移り度いと思ひます、然うすれば、二人きりで淋しいんですから、御一緒に何でも出来るぢや御座いませぬの。」

奈美子は頬に頷いて、感謝の意を表してゐるが、

「でも、お兄様とお家をお持ちになるのでせう？」

かう訊き度さうにするので、緋紗子はぱつと頬を染めながら、

「でも何時のことか分りませぬのよ。」

などと軽く溜息を吐いて見せた。

「まあ、お母様が何故お許しにならないんでせう、お劇でお目に掛つたきりですけれども、大層御親切な方のやうぢや御座いませぬの。」

「兄ですか？ え、兄は立派な人ですけれども、母と性分が合ひませぬのね、でも、最後まで堪

へ忍ぶつもりでをりますの。」

かう緋紗子は諦めたやうに、淋しさうに笑顔を見せて言ふので、

「何か、御信仰がおありになるんぢやないんですか、でなければ然う淨い心になれませんわねえ。」

奈美子は更に深く話しを突き入れるやうにして言つた。

「神様を？え、それといふのも私は、幼い時から、親に離れてをりましてねえ、随分淋しい思ひをして育ちましたし、それから田中の父が選んで呉れました學校が、宗教學校だつたものからね。：：ですから、辛いことにはよく度々會つてゐますのよ。」

かう自分の經歷を簡単に話してきかせた時には、それがよくよく奈美子の胸に、腦に、深く浸みこんで、なされたものと見えて、感激し易い彼女の眼には、もう熱い涙が湧き上つて来て、仕舞ひには、堪へられなくつて、寢巻の袖口を直と顔に押し當て、泣いてゐた。

「何かお氣に障りましたの？」

緋紗子は手を伸して、瘡せた彼女の肩に手を置きながら、よほど甚く感動されたらしい、彼女

の容子を、氣の毒さうに眺めてゐた。

「矢張り、かうしたお話はよくないんですわねえ、御病氣中だからぢきお感じになりますからね。」

「い、え、い、え、それどころぢやないんです。お若いのに、あなたのやうに健固りしてゐらしてつて而して美しい心を持つてゐらつしやるのを見ますと、私はつい耐まらなくなるんです。さういへば、私の過去は、お話も出来ない位、實に汚くつて淋しいんですの。」

かう泣き濡れた顔をあけて、彼女が言ひ出すと、いつか緋紗子も思ひを惹き入れられて、靜かに頷いて見せた。

一四九

「今日は、あの小村さんは何うなさいましたの？」

奈美子の感情が少し鎮まつてから、緋紗子は何氣なく訊いて見た。

「一寸朝出て参りましたの。大方仕事を探しに行つたのでせう。」

かう奈美子は打明けて言つて病院を出てから後の二人の生活の已に行き詰つてゐることなどを話してきかせた。若くて、世の中のことに疎い緋紗子のやうな境遇では、そんな話しは容易に理解が出来なからうと思つてゐるが、意外にも緋紗子には一つ一つ頷きながら静かに首を傾けてきいてゐた。

「ほんとに、寝て居られないやうな氣がしますの。」

「然うでせうねえ、種々なことをお考へになるとねえ。なら、一層のこと、東京の兄にでも相談なすつて御覽なさいな。兄はあ、言つたやうな人ですけれども、それは情深い男ですから、私も信用して呉れてゐますから、屹度何か御相談にのりますわ、會社も拵へてをりますし、始終好い方を欲しがつてをります容子ですから。」

などとも言つて、小村さへそれを快よく思ふやうならば、東京の方へ直に自分から依頼の手紙を出しても好い、かう頻りと勤めては、

「東京の方が、づつと面白くつて好いわ。あなたも御病氣が治つたら、あつちへ入らつしやいな、屹度、愉快な生活が出来ますわ。私も當分は母と二人で別荘の方へ移る意りですけれども、將來

は東京で暮す意りですから
……。」

「では、小村が歸りましたら、さう言つて勤めて見ます。」

彼女の病氣は、夏一杯はかゝりさうなので、それさへ濟めば二人で何處へ行つても好い、かうすべてを浚け出して言つて了つた。

「今日お目に懸りたかつたのですけれども、又其内伺ひますから、何卒宜敷く。」



あなたもお大事になさいましょ。」

かうも行き届いた挨拶を残して緋紗子は間もなく歸つて行つた。

それを玄關まで見送つて行つたお竹は、頓て大きな果物籠を提けて入つて來ると、

「お土産を頂きました。」

かういふお竹にも、何となく人懐かしい緋紗子の印象は、快いものに刻み付けられてゐた。

頓て、白と藤色とのリボンでからけた、緋紗子の贈り物は、お竹の手で薬瓶などの並んでゐる

小棚の上に載せられた。

「胸の方の氷は？」

お竹は然う言つて、病床に寄り添つて來たけれども、それから少時間の間、病人は靜かに眼を

閉ぢて、種々の思ひで亢奮し易い胸をぢいつと鎮めてゐるやうに見えた。

緋紗子の残して行つた印象をあれこれと辿つて考へて見ると奈美子は一種不思議な氣がしてな

らなかつた。眼の涼しい品の佳い顔、襟足の長い格好の良い鬘の形、それにものを言ふ度に、一寸

小首を傾ける癖のある可憐な態度、それらは此春會つた時よりも、著しく大人びて、俄に年老て

來たやうではあつたけれども、女でなければ、容易に分らないやうな、繊細な長所を多く備へて

ゐる緋紗子の性格は今度會つたことによつて始めて深く理解することが出來たやうな氣がした。

自分より年齢の若い、あゝした純な少女の手にすがつて、自分達二人の將來を依頼む氣にはな

れなかつたけれども、東京の兄のことまで言ひ出して、今後の生活に何かと心をつかつて呉れる

彼女の神のやうな美しい心には、感謝せずにはゐられないやうな氣がした、親には早く離れ、他人

の養父母の仲で育てられて、更に引取られた龜井の父にも死に別れて、而うして放恣な複雑な性

格の母親の傍に、ああして日常の氣苦勞をしてゐるので、自然に年齢よりも餘計に、深い人情に

揉まれて來て、同情も強くなつたのかは知らないけれども、それでも自分などの、遠く及ばない

感情の淨い女だと言ふことだけは奈美子もひそかに、羨ましく思はずにはゐられなかつた。

IHO

奈美子の胸の病氣は、心勞と極度の衰弱から來たものであつてその療養として必要なことは絶

對の安靜を與へるより他に仕方はないと、内科主任の醫者は頻と彼女自身に得心のゆくやうに、

又はお竹に、雪之助に、語つてきかせたけれども、それらの周囲の感化よりは、彼女自身の心が、いつの場合でも平静を保ちがたくて、直に感動したり又は身も世もないやうに、過去の罪過を、さては現在の苦痛を甚だしく嘆き悲しんだりするので、時としてはお竹も、雪之助も、始末に困るやうなことがあつた。悲哀も恐怖も無い一日とても、彼女には容易に得られなさうに見えた。あまり泣悲しんだあとは、熱が彼女を襲ふて来て、まるで悪魔の手に苛め嘖なまれるやうな酷い苦しさを心にも體にも受けるかして、聞くに耐へないやうな唸り聲をたて、悶え苦しんだ。雪之助は丁度目のあたり惨劇を受けた彼女を見るやうな気がして、ちいつと椅子に寄りか、つて、彼女を見守つてゐても、時としては、ついと立つて出て行つたりした。

彼女のその苦しきは、容易に人々には解らなかつたけれども、彼女がたゞ熱の苦患に、胸の痛さに傷口の疼きに耐へかねて、此世のものとも覺えぬ苦痛に襲はれるものとは、彼は何うしても考へられなかつた。其處には彼女の生命を奪はうとして果さなかつた男の怨恨が、未練で、未練で、静かな眠りにも入ることが出来ないやうな熱拗な男の思念が、又は獄の苦悶に堪へきれずして、板間の上にもまどろむ夢にも、彼女に通ふて来る心が病床の彼女の身に、眼に見えない力で襲ふ

て來るとしか思へないやうなところがあつた。男の怨恨、男の思念、男の靈魂が、さうまでして彼女の纖弱な體や心を苦しめずには置かないのかと思ふと、彼は嚇として思はず拳を握り締めるやうな氣になつた。

けれども、時とすると病人も極、もの靜かで爽快らしい面色を見せることがあつた。

「ほんとに、いつでも然ういふ風にしてゐると、早く治るんだよ、今は、何にも考へてゐないだらう、然うだらう、心の持ちやうで、氣になることでも、氣にしないであられるものだよ。」

かう彼は言つて、頻と優しく慰めたりした。

「え、今は大變に幸福を感じてゐる時なの、あなたと、身體が治つてから、一緒に東京へ行つて家を持つて、私も何かして十分に働かうと思つたりして、空想を描いてゐるんですもの。」

「然うかい。」

かう彼は軽く答へて、病人と同じやうに、他愛なく笑つて見せた。

今後の生活に話しの觸れることは、彼も不愉快なやうな、恐ろしいやうな感じがしたが、然し病人が折角描いてゐる美しい空想をむざと破壊するのも痛ましかつたので、彼は好い加減に調子を

合せてゐた。

病人は言ひつゝけた。

「秋まで、私はかうやつてゐなければならぬのですから、あなたまで然うして無駄にして戴くのはお氣の毒ですから、何なら先へあなただけ東京へ行つて下すつても好いよ。私はあとで、呼び迎へて下すつたらそれで好いんですからね。」

「然うだね、お汝さへもその氣になつて呉れたら、俺だけ先へ行つても好いね、けれども、苦悶するところを見ると、俺でも傍にゐなければ、叔母さんだつて耐らないだらうと思ふことがあるからね。」

「もう大丈夫よ。大丈夫よ。」

その時は、奈美子はかう機嫌の好い顔をして、強さうなことを言つてゐた。

けれどもそれは三日に一度か、四日に一度かで、あとは險惡な容態が、心の懊惱と共に執念く彼女を捕へた、此調子で行けば、病氣は更に深く進んで行くかのやうな懸念が、人々の心を暗くした。

一五一

奈美子の容體が、あれからづつと悪くなつたといふやうなことを、お竹が秋江にも誰れにも知れないやうに、緋紗子を電話口へ呼び出して、そつと囁いたのは、彼女が病院を二度目に訪ねて行つてから、又一週間ばかり経つた後のことだつた。

彼女は何をさし措いても、氣の毒な病人のために、慰めの言葉をかけてやりたくなつて、そのことを知つた夕方、川端の病院へ俵を飛ばせた。

入つて行くと隣の室には、お竹が何か雪之助と囁いてゐるところだつたので、彼女ははつとして後退りしたが、

「やあ、ようこそ、さあ、何卒中へ。」

機敏な雪之助の眼が彼女を認めてかう聲をかけて勧めるので緋紗子には中に入りは入つたが、次の室の扉は固く閉ざされてゐて、看護婦が氷枕を取り換へに行つたり、驗温器を持つて入つたりする容子が、此前二度ばかり來た時とは、全然り違つて見えた。

「又お悪くなりましたの？」

かう緋紗子はお竹が病室の方へ入つて行つたので、雪之助に對つて訊くと、

「はあ、遂々肺に進んで来たやうでして。」

かう一寸言ひ盡つてはるたが緋紗子が同情にたへないやうな眼をして黙つてきいてゐるので、彼は更に言葉をついで、もう傷口は殆ど癒え始めかけたやうなので、此上は胸の病氣のために、内科の専門病院へ轉ることが、一番安全な道だ、と言つたりした。

「矢張り内科でなければ、十分のことは出来ませんわねえ。」

「え、然うです。そのことは早くから氣がついてゐたんですけれども、病人がその氣になつて呉れないものですから。」

「さうですわねえ、矢張り遠慮をしてゐらつしやるんでせう。」

「それもあります、氣が勝つてゐて、よく病氣の養生をしやうとしないものですから、今日も、大變晝間亢奮しましてね、それからあなたにもお會ひしたいと言つてきかないものですから、御迷惑だらうと思ひましたが……。」

「まあ、然うでしたの？ 直ぐには出られないのですから……。」

秋江には秘密で、彼女がかうして通つて呉れることを知つてゐる彼は、頻と頷いて見せたが、

「で、お店の方は、別に變りませんか。」

ふと話を轉換するために、彼はかう切り出すと、彼女は改まつて、

「え、あれは賣るところに定りましたの、買ひ手があるもんですからね。」

と、言つて、雪之助を除いたあとの店の寂れたことや、あれこれと齟齬する度に、秋江も大きな店を持ちこたへて行くことの困難をつくづく感じて、幸雄が最近に買手のあることを報知て來ると秋江は遂々その心になつて仕舞つたことなど、率直な調子で話した。

「さうですか、それは反つてお母様のためにも好いかも知れませんが、あゝして終始苦しんでらつしやるよりか、靜かに海濱でお暮しになるやうに、する方が好いでせう。」

「え、さうですの。」

緋紗子も、かうした落付きのある、彼の話し振りをきくと、あゝした忌はしい問題のなかつた頃の彼に對する親しみが、懐かしみが、油然として心にとけ入つて來るのを感じた、もともと彼

には別に憎悪を感じてはゐなかつたので、あの頃の親しさを取返して、かうして話しをすること
は、彼女も不愉快ではなかつた。

一五二

「で、あなた方は、あの家をお退きになつて、東京にでもお出でになりますか？」

「い、え、其處まで、まだ進みませんの、私達の努力がまだ足りませんから……。」

私達といふ言葉に、緋紗子は幸雄の意味を含ませるゝことが、彼にはよく分つた。

「ぢやまあ、暫く、海濱へでも行つてお暮しになるんですね、その方が好いでせう。」

「え。」

「世の中のことは、全く運命ですからね、善いことをしやうと思つても、それが意外の罪惡にな
ることもあるし、悪いことをやつて、幸福になつたり、人にもそれが仕合せになることもありま
すからねえ。」

彼の小さい辯護だとは氣がついたが、別にそれが緋紗子を嫌に思はせなかつた。

「本當にそうですわ。奈美子さんなんかでも、運命のためですわ、本當にお氣の毒ですわ。然
う言ひながら、頻りと彼女は只一目でも病人に會つて行き度いやうな容子をするので、彼は
話しの切れ間を待つて、彼女を病室へ伴つて入つた。

病人は、晝間よほど神経を刺戟したと見えて、その疲勞でぐつたりとして眠つてゐるらしかつ
た。けれども、緋紗子は、せめて寝顔だけでもと思つて、病床の近くに寄つて行くと、思はず息
を凝らしてそれを凝視した。その寝顔は、電燈の影になつてゐる加減もあつたらうけれども、眞蒼
の蠟のやうな固さを帯びてゐるやうに見えた。窪んだ眼の邊りと言ひ、尖つた鼻の工合と言ひ、
實にそれは悲惨を通り過ぎて、寧ろ嚴肅な恐怖を其處に感じないではゐられなかつた。

「まあ、お變りになりましたこと。」

彼女は微かに言つたが、其利那何とも言へない、暗黒な感じと極度の哀しみが、この病室の中
に充滿に漾つてゐるやうに思はれてならなかつた。

「ま。」

かう緋紗子はもう一度言つて、而して溜息をついてその寝顔をつくづく眺めてゐるが、ふと

何か思ひ付いたやうにして雪之助の立つてゐる窓の方へ動いて來ると、

「あれぢや大分に甚いやうぢや御座いませんの？」

かう言つた彼女の眼には、きらりと涙が光つた。

「え、甚いんです。」

「内科の病院へ入れてお上げなさいましな、ねえ、私今夜歸りましたら、失禮ですけれども、それだけの費用はお送り致しますから。」

「い、え、飛んだことです。」

かう彼は慌て、手を揺つて見せたが、緋紗子はなほ然う言ひ張つて應かなかつた。

不圖病人の微かに唸るやうな聲がしたので、二人は耳を敬てて其方を見返つたが、別に何でもなかつた。看護婦がそつと病床に寄りそひながら、驗温器を調べてゐるのだつた。

「お歸りがおそくなつて、又お家で心配してゐらしやるでせう。」

彼はかう小声で囁くやうに言ひながら、頻とそれを懸念するやうに見えたが、緋紗子は容易に歸つて行かうとはしなかつた。

夕闇で薄暗かつた庭樹の中に、仄かな蒼白い光りが次第に大きく擴がつて來て、そよそよとした夜風と共に、その幽かな光りが窓からしのびやかに這入つて來た。見ると、月が向側の病舎の一棟を照してゐた。

驗温器を調べてから、看護婦はその電燈に黒い布を被せて、去つて行つたが、仄暗い室の中には、靜かに靜かに恰も死を待つ人のやうに、白い蒲團につままれて横たはつてゐる奈美子の姿が、彫りつけたやうにくつきりとして浮かんでゐた。

月見草

月見草

大正十年二月二十日印刷
大正十年三月十五日發行

月見草 附

金貳圓五拾錢



著者 相本まささを

發行所 三井玉輝

東京芝公園

印刷所 株式會社 大高印刷所

東京市芝區櫻川町廿番地

發行所

東京芝公園
振替東京一四一七七

支文社

所本製角兩……所本製

近刊の作物五篇……立文社發行

長編小説 忘れがたみ 菊池幽芳

長編小説 野火 長田幹彦

長編小説 續ゆく春 長田幹彦

長編小説 戀 草田山花袋

長編小説 戀を裏切る女 菊池幽芳

戀草はもう直ぐ出來ます。それに續いては野火忘れがたみ續ゆく春などです戀を裏切る女はまだ一寸間があります。最近の出版では小杉氏の三代地獄、花袋氏のくれなゐ、霞亭氏の金扇などは好評噴々です。

1871

終

